
異伝子保有者の街

佐倉伸一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異伝子保有者の街

【Nコード】

N3442Q

【作者名】

佐倉伸一

【あらすじ】

遺伝子は狂い、人は異能を手に入れた……。異伝子保有者の香取健一は、十年ぶりに故郷へと帰ってきた。だが、そこにいたのは十年前に彼が刺した少女で……。！
学園バトルアクション、開幕します！

プロローグ（前書き）

久しぶりの投稿になります。初めての方、初めまして。前作を読んでくれた方、お久しぶりです。

今回も学園ものです。ゆっくり更新ですが、よろしくお願いします！

ブローグ

揺れる電車から、彼は外を眺めてみた。世間はまだ夏休み、風景の中には学生らしき姿も多い。満喫してるな、と思わずひとりごちたのは、窓際に座る淡いグリーンの上着を着た青年だった。

いや、まだどちらかといえは少年だろうか。高めの背丈と細身が彼の年齢を実際より上に見せていた。唯一気になる点といえば、彼の頭髪が真つ白だということと、季節外れの見るからに暑い黒の革手袋くらいか。

窓枠に肘を突いたまま、秋からは自分もあなるのだと思って彼：
香取健一かとりけんいちは思わず苦笑いした。

彼の隣りには、出張で外国にいる父がくれた手袋と同じく黒いスーツケースが横倒しになったまま。そのマットブラックの外装の上にあるのは、先程まで読み返していた一枚の書類。

『堺間市立高校転入許可証明』

この書類が、彼が一時期離れていた故郷に帰ってきた理由。

（十年ぶりかあ……）

親の都合プラスで転校していた彼が、この街に戻ってきたのは今度は母の転勤のせい。前の学校への諸処の手続きのため後から引越すことになった彼は、やっと今日、故郷の地を踏むことになった。

電車のアナウンスが到着を告げて、彼は席を立つ。ジーンズから半券を取り出し、スーツケースの中に書類をしまう。中はいえ、衣服と財布、いくつかの書類のみ。

（さて、と！）

アナウンスの終わりに合わせるように、電車のドアが開く。

そして彼は、久し振りの故郷に降り立った。同じ駅に降りる人はまばらで、ここが地方都市だということを香取に思い出させる。

（人が待っている、って聞いてたけど……）

彼は地図の類を持っていなかった。母からのメールを読み返しながら改札を出ると、自分が古里に帰ってきたことを強く感じた。

辺りを見渡す。見知った顔を捜してみる。

（てっきり、母さんが来てると思ったんだけど）

先にこちらに転居した母。どうやらその姿は見当たらない。じゃあ誰が？　と思うが、心当たりも見当たらない。

（困ったな）

メールの文面には、『あなたもよく知ってる人よ！　はあと』とだけ。ぶっちゃけこのノリは無いよ母さん……と脳内で突っ込みを入れても、何も解決しない。

仕方ない、ともう一度辺りを見てみる。すると、なぜか後ろからジーンズを引っ張られた。つられて彼はゆっくり振り返って、

直後、彼は背骨に氷柱を刺されたように冷たい錯覚と共に硬直した。

「久し振りだね、健！」

振り返って見たのは、五歳くらいの少女。まだあどけない面立ちだが、腰上まで伸びる豊かな黒髪とあいまって将来性を充分に感じさせる。

「いやー、髪が白いからすぐ見つかったよ。ごめんね、ちょっと遅れちゃった」

そんな事はどうでもいい。そう香取は思う。何よりもまず重要なのは、

なぜ、なぜ十年前に自分が刺した少女が、そのままの姿で目の前にいるのか、という事だ。

「……あれ？ どうして無反応？ まさか……惚れた!？」

彼女の思考が何をどう飛躍してそうなったか全くわからないが（断じて彼はロリコンではない）、内心の動揺を無理矢理押さえつけて確認のため香取は口を開いた。

「……誰？」

「あつ酷い！ 忘れたの？ 私よ私。あー、見た目があれだったかな？ ちょっと待って。すぐ元に戻すから」

意味のわからないことを言いながら、少女はジーンズから手を離れた。直後、視界の中で彼女だけがカメラのピントが合わないようにブレてあいまいになる。思わず香取が目をこすると、そこにいたのは先程の少女の時間を十年ほど進めたような期待通りの成長をした

女性が。

「…………どう？　これならわかる？」

その姿を見て、香取はやつと彼女が誰か思い出した。

「…………化野、か？」

あたしのなるみ
化野育美。十年前彼が助け、彼が故郷を去る原因になった少女。

知り合いの中で、香取のことを『健』と呼ぶのは彼女だけだ。すると彼女はくすりと笑って、言った。

「正解っ！　その様子だと、私のことはちゃんと覚えてるみたいね？」

「あのね、忘れろつてのが無理だつて。…………あんなのがあったし」
明るい彼女と対称に、思い出したくないといたげな香取のため息に化野も神妙な顔になった。が、彼女はばん、と香取の背中を叩いて切り換える。

「ま、今気にしてもどうしようもないでしょ！　それよりほら、行きましょ。家まで案内するから、ついてきなさいな」

どうやら案内役らしい化野に遅れないように、香取もスーツケースを曳きながら歩き出す。

「そういえば、化野とは同じ学校なんだっけ？」

道中、手持ちぶさたから会話が始まる。香取の雰囲気は微妙なまま

だが、返す化野の声は旧友との再会を喜ぶようなままだ。

「堺間市立高校よね？ うん。今度案内してあげるわ。まだ二学期まで一週間くらいあるし、いっしょに行ってあげる」

「それはありがたい」

などと話しながら、駅から歩くこと数分。新しい家に着いた。

「はい！ ここが健の新しい家だよ」

なぜか化野が誇らしげなのは放置。真新しい玄関扉の前に立つ。ふと気になって尋ねてみた。

「母さんはいるの？」

「さあ？ お迎えを頼まれたのは昨日だし、知らない」

「ふむ……」

あの母だ。サプライズを仕掛けることは考えられる。

「化野、ちよつとこつち来て」

「ん、何？」

疑いなく化野は来てくれる。危険のないよう手招きして玄関の横、扉の蝶番とは反対側に立たせた後、自分は扉の影に入るように扉を開けた。

直後。

ズドン、と戸が内側から恐ろしい勢いで押し付けられた。もちろん化野は何もないが、香取はモロに直撃する。そして家から出て来たのは、シヨートの髪をざつくばらんに結んだ女性が。

「……あら、育美ちゃんじゃないの。お迎えを頼んで悪かったわね。それで、うちの健一は？　せつかく私が自動ドアトラップを仕掛けて驚かそうとしたのに親の期待を裏切るなんて悪い子ねえ」

いきなり出て来て無茶を言う女性。化野は呆気にとられていた。いや、ぶっちゃけドン引きしていた。

「あ、あはは……」

「……痛い」

ひきつり笑いと苦悶の呟きが重なる。と、気付いたらしいその女性
かとりかなえ
……香取香苗が扉の向こうに挟まれていた健一を発見した。

「あら、そっち側に引つ掛かったの？　予想外の掛り方をしたわね。ほらほら、早く入りなさい。部屋に荷物が届いてるから。育美ちゃんはどうする？　騒がしいけど、お茶くらい出すからどうぞ」

マシンガントークを地で行くのがこの人の特徴だ。その上多少強引でエキセントリック。尋ねてる癖に既に家にあがることが規定事項になってる辺りからお察しください。

「母さん……何かあったらどうするのさ」

自分の母親である香苗に文句を言いつつ、香取は盛大に打ったヒリヒリする額に触れる。手で確認してみると、たんこぶにはなっていないらしい。

「何言ってるの。大丈夫に決まってるでしょうに。育美ちゃん、悪いけど居間のクローゼットの上に救急箱があるから、診てやってちょうだい。私はお茶とお菓子を持ってくるからよろしくね」

それだけ言っささと香苗は家に入っていっってしまう。残された二人は顔を見合わせた。

「昨日も思ってたけど……凄いな？」

「残念ながら」

おそろおそろの若干おかしい確認に返った返事に、化野が嘖き出した。

「あははっ！……うん。それじゃ、私はここで」

「ありがとう。助かったよ」

手を振って化野と別れ、香取は新居に踏み出す。新しい家が懐かしい故郷にある。そんな矛盾を感じながら。

母になぜ帰したのか文句を言われたり新しい部屋の広さに目を白黒させたり荷解きをしたりと、その後は忙しく。

そうこうしているうちに、すっかり夜になってしまった。

（そうだ。この部屋、ベランダがあるんだっけ）

ベッドの上で、香取はふと思いついた。黒いロングコートをしまつたままの鞆を蹴ってつまずいたりしつつも窓を開け、外に出る。

「……………おお、凄い」

思わず声が出た。空が高く、澄み切っている。まるでプラネタリウムのような星空だった。

「やっぱり、向こうとは違うなあ……………」

手すりに肘を突いて、空を見上げる。都心の空はもつとあいまいだった。

（さあ始まるぞ、『赦アンフォギーブンされない者』。気楽にはいかない日々が）

環境の違つ、新しい日々がこれから始まる。戒めも改たに、香取の一日目の夜はふけていった。

1st 遭遇の朝

「う……ん？」

星空に感動した翌日。香取はベッドの上で目を覚ました。慣れないベッドのせいか、体が微妙に疲れている気がする。

「……っ！　くあ！」

そう思って体を伸ばすと、変な声が出た。若干眠たい頭を抱えて香取はリビング兼台所へ。母が起きているなら、朝ご飯を食べようと思ったのだ。が、

『母さん仕事だから、先に行くわ。レシピと材料置いておくから、自分で作って食べなさい』

こんな手紙が。

「どうしろって言っのさ……」

別に料理ができないという訳ではない。が、問題は机の上に材料が一つも無いということだ。

「家庭内暴力……違うな。あの人が『悪戯好き』なだけか」

思い直して、手紙を手を取った。案の定、裏側に続きがある。

『まだ暑いし、腐るといけないから材料は冷蔵庫に入れておく。追伸。夜まで帰れないから、お昼ご飯は適当に』

自由過ぎる。香取がため息にしつつ冷蔵庫を見ると、卵に浅葱、そして魚の干物が。

取り出してレシピを見つつ、香取は台所に立った。

「何をするかな……」

食事を済ませ、着替えから始まる朝の支度を終わらせた香取は自分の部屋にいた。引越し荷物を詰めた段ボールは個人のものだけなので元から数も少なく、既に全て片付けて部屋の隅に置いてある。もちろん、中身はまだいくつか床の上に置いてあるが、教科書などどうしたらいいか判らない物やすぐには片付けなくてもよいものばかりだ。

(……………)

もちろん、家の中は無言。誰もいないのだから当たり前ではある。

(よし、外に出よう)

思い立ったがなんとやら。香取は部屋に戻り、財布と携帯電話を手近な鞆に突っ込んで外に出た。

(おお～～)

外に出てまず思ったのは、空気の違いだった。都会と違って、空気が美味しい。幼い頃は虚弱気味だったはずの化野があそこまで快活に

なつた一因は間違いなくこれだろう。

さてどこに行こう、と思ったが、昨日に引き続き地図がないことを思い出す。どうせ散歩だし、と香取は過去の記憶と地理感を頼りに歩いてみることにした。

で、数分で迷った。

「ここ、どこだ……？」

香取は、見知らぬ路地にいた。

見通しが甘かった。考えてみれば、記憶は十年前だ。道は未知になり、建物は見知らぬものへと代わっている。

とりあえず、と思い駅を目指すが相変わらず。

迷いに迷って彷徨って、そしてもの凄い現場に直面してしまった。

「……動くな。動けば殺す」

「ひっ……」

恐喝未遂。否、現在進行中か。黒色のロングコートを着た明らかにカタギでない初老と思われる男が香取と同じくらいの少女の後頭部に手指のピストルを突き付けていた。傍から見れば間抜けな光景だろうが、実際はそうでは無い。男の人指し指の先端は、まるで超高熱が固まったように赤く紅く発光している。少女は壁に張り付く姿勢で、両手を上に上げていた。残暑の季節には珍しく長い手袋をつけているその髪は、香取と同じく白い。

「よし……動くな。動けば命はない」

黒コートが懐からなんと手錠を取り出した。鈍く日光を照り返すあの質感、多分おもちゃではないと確信できる。

だがそんなことより何よりも、香取にとって一つだけ許せないことがあった。

（殺す、ねえ……）

物騒だとかそういうレベルではない。ただ単純に、彼の本能の領域で、聞き逃せない。

（僕の前で人を殺そうなんて……認められないんだよね）

何よりもトラウマが疼く。認めるなと責める。自分の犯した過ちを、繰り返させたくない。いや、させない。少なくとも僕の目の前では、ただし、彼のルールの中で。

携帯電話を取り出す。で、何処にも繋がないまま耳に当てて大声で叫んだ。

「あー！　もしもし警察ですかっ！　ええとですね、今日の前で暴漢が！　場所ですか？　駅前 の路地裏です。急いでくださいな！　あ、服、服が！」

わざと聞こえるようにあることないことぶちまけてみる。案の定、男がこちらを見た。

「うわこつち来た！」

注意を引くように香取は叫ぶ。彼の作戦としては、あとは逃げ回るだけだ。残念ながら彼は対抗できる能力は無い。正確には違うが使うことは自分に禁じている。

携帯にこれ見よがしに叫ぶと、向こうが無言で指先をこちらに向けただ。まるで排除すると言わんばかりに。

直後、指先から走る熱線。

香取が慌てて飛び退くと、足元のコンクリートが焼けて蒸発した。全力で逃げ出す。背後からは荒々しい足音と怒声と熱線が飛んで来る。香取は跳ね回るように回避していく。

（無茶苦茶だな……これは『過熱』かそのもの『熱線』の異伝子か？）

常識的に、ただの人間がそんな高熱を扱える訳かない。それを可能にするのが異伝子^{ジン}……通常とは異なる遺伝子である。もともと、一部の例外を除いて、遺伝はしないしそもそも遺伝子でもない。ただ、それらが特殊なタンパク質を合成させる能力を持ち（これが名前の由来）、そのタンパク質がこんな現象を起こす能力を与える。ついでに多少の身体能力向上作用もあるのだが、個人差がほとんど無いためあまり重要視はされない。

誰が言ったか、異常遺伝子。そしてこれを持つ人は個々にその能力に基づく『二つ名』が与えられる。ちなみに有無の判定が可能であり、出生と同時に検査されるため戸籍にも登録されている。

化野が見せた変身能力もこれだ。そして香取に宿る能力もある。彼は使わないが。

「あつぶな！　この威力、火種かアンタ！」

異伝子にも大まかな大別があり、火力つまり攻撃に優れるものは火種と呼ばれる。他にも、単純に火力では測れない特種、異常すぎる禁忌種と。大体はこの三種類になる。

（あの威力からして、間違いないだろうな）

文字通り火種。しかしどうやら照準はあまりよろしくない様子。

（逃げるしかない！）

香取はそう判断した。曲がる。まず曲がる。門があれば曲がる。曲がる時にスピードを落とさないコツは、直前に一歩だけ反対側に足を置くことだ。一瞬速度は落ちるが、振り子の作用で取り戻すことができる上、体が傾くため距離を稼げる。

つまり曲がる程に距離は引き離せるわけで、更に緩急がつくため相手の視界からも逃れやすい。入り組んだ路地ならではの逃げ方だ。

だが、今回は裏目に出た。地力が違ったのだ。当たり前の話、いくら強化されたとしても、それが同じ値なら本来のスペックが高いほうが有利に決まっている。

「うがつ！」

曲がる瞬間。その一瞬動きが鈍るタイミングで熱線が飛んだ。掠める程度の当たりだったが、場所が悪い。

（あ、足首かよ……っ！）

思考で悪態をつく。傷付く場所としては最悪だ。ダイレクトに移動

に響く。

「……捕まえたぞ、このクソガキが。てこずらせやがって！」

そして、追いつかれた。手首を強く掴まれる。

「てこずらせたな。だが、終わり……だ……」

しかし、勝ち誇るはずの男の声は不自然に途切れた。なぜなら、香取の手袋が取れてしまったから。

その下の皮膚を、見てしまったからだ。

手袋の下にあったのは、火傷で腐り果てたようにグチャグチャになってケロイド状になった皮膚だった。古傷になってはいるものの、火ぶくれが裂けたような傷や炭化したのか黒ずんだ部分、拳げ句の果てには膿んで腫れ上がったと思しき部位もある。

「……見たね？」

その手の持ち主の声に、男は弾かれたように顔を上げる。相手の顔は、笑っていた。

こんな火傷は、偶然では有り得ない。まるでわざと何度も自分で火のついたタバコを押し付けたような、あるいは煮えたぎった熱湯に何回も突っ込んだので無ければ、こんな火傷は有り得ない！

「見たなら、しょうがない……」

香取はパチリと手を鳴らしながら、言った。

「『野分の調』！」

その言葉が終わると同時に、彼は先程の想像よりも恐ろしい体験をする。

「ぎいあああつ！」

喉が掠れるような自分の悲鳴と羽虫のような無数の煌めきが、彼がその場で知覚できた最後のものだった。

「あ、言い忘れてた」

悲鳴の残響を聞き届けてから、いつの間にか黒いロングコートを着た香取は振り返って言った。

「『殺す』なんて、軽々しく口にするのは止めたほうがいいよ？……って、聞こえてないか」

男は、全身に引つ掻き傷のようなものを負って白目を剥いていた。ちよっとやり過ぎたかな、と香取は後悔する。

「そういえば、結局ここは何処なんだろう？……あ」

逃げ回ってがむしゃらに曲がるうちに、どうやら見知った場所に出たらしい。

（怪我の功名、って奴かな）

幸いにも駅前だ。走り回ったことだし、そろそろお昼ご飯にしようと思ってポケットに手をつ突っ込んだところで、気付いた。

（携帯落としたっ！？）

いつの間にか、携帯電話が消えていた。多分、走る間に落としてしまったのだろう。

結局、携帯電話を探すうちに日は暮れてしまい、昼飯は食べられなかった。

携帯電話は、見つからなかった。

2nd 見学の案内

「で、携帯落として帰ってきたのね結局見つからないまま。警察に連絡はしてみたの？ どうせしてないでしょう。いいわ連絡はしておくから待つてみなさい」

夕食の席で母のマシガントークに辟易した次の日。香取はまた街にいた。もちろん、携帯電話を探すためである。いざと言う時無いと困るからだ。

（確かこの路地だったはず……）

見覚えのある駅前路地。昨日の行動をさかのぼるように歩き回る。だが、午前中を全て費やしたのにもかかわらず携帯のけの字も見つからなかった。

（しょうがない、昼にしよう）

近くのハンバーガー店に入り、一番安いハンバーガーとドリンクを注文し適当に食べていると、何だか見た覚えがある顔が。

「あ、健！」

ガラス越しに気付いたらしい化野が香取に手を振る。こちらも振り返すと、どうやら一人らしい彼女は一直線にこちらに向かって来た。わざわざ来てもらう必要もないと思って香取が急いでハンバーガーを胃に納めようとすると、化野はとんでもない速度で近寄ってきた。

「久しぶりだね！ どう、この街は」

あっという間に隣に座られた。足に微妙に歪みが残っている辺り、どうやら足を変身させて走ってきたらしい。

「久し振りって言ったって、一日だけじゃないか？」

「一日千秋って言葉、知ってる？」

「なるほどね」

なんか違う、と頭が言うが、とりあえず置いておく。

「それが僕の転校するところの制服？」

化野は、なぜか制服を着ていた。夏服だろう。セーラー服というよりはブレザーに近く、モスグリーンを基調にしたチェック柄のスカーフトとネクタイが白地のシャツに生えて高級感を演出している。

「うん。補習とかいろいろあったから、さっきまで学校にいたんだ」

なるほど、と頷きながら、ふと気になった。

「そういえば、学校ってどこにあるんだっけ？」

頭の中の地図にあるにはあるが（携帯を探すに当たって叩き込んできた）、やはり実感が欲しい。

「……よかったら、案内してあげようか？」

「いいの？」

渡りに船とはこのことだ。と思った香取は思わず化野の手を握って感謝を述べた。

「ありがとう！ 助かるよ」

だが、化野の返事がない。真っ赤になっておろおろしているだけだ。そこでやっと香取は自分が化野の手を握っていることに気付いて、慌てて手を離す。

「っと、ごめん！」

急いで謝った。確かに、いきなり他人に手を握られたらびっくりするだろう。

「……………もうちょっと握ったままでも……………」

「何か言った？」

「うっん、なんでも！」

「？……………ならいいけど。そういえば、お昼ご飯は食べた？」

もし香取が席を立たなければ聞こえただろうその声は、イスと床の摩擦音に消えてしまった。

「まだ。けど、今から食べるよ」

「了解。それなら、なにがいい？ 買ってくるからさ」

「へ？ いいよ、自分で買うから」

化野は鞆から財布を取り出そうとする。それを押しとどめて、香取は自分の財布を取り出した。

「おごるよ、学校案内のお礼にさ。それくらいはいいだよ」

もちろん、香取に下心はない。ただ十年前のうしろめたさを多少なりとも慰めたいだけ、言うなれば自己満足でしかない。……それを、他人がどう捉えるかはまた別の話だが。

「……それじゃ、コーラとチキン二つ」

「あいよ。僕のそれもコーラだから、よかつたらあげるよ」

「ふえっ!？」

化野が奇妙な声を出した。香取はそれを気にかけることなくカウンターへ注文を取りに行く。幸い列はあまり長くなく、すぐに受け取ることができた。

「はい、お待たせ」

持ってきたトレイを香取は化野の目の前に置く。自分も元の席について、なんとなく化野を見つめる。香取の全てを狂わせた彼女は幸せそうにチキンにかぶりついていた。

これでいいのだ、と香取は自分に言い聞かせる。償いには、ならないだろう。そう理解していてもなお、止めることはできない。責め苦という焦躁が彼の背中を焼き続ける限りは。

程なくして食事を済ませた二人は、そろって店を出た。

ジューズは、なんだか減っているような気がした。

「そつえば僕、私服なんだけど大丈夫かな？」

「うーん。まあ、どうにかなるでしょきっと。うちはちょーっと特殊だし」

なぜ強調するのか。

「特殊って……？」

そこはかとなく嫌な気配を覚えた香取は、歯切れ悪く尋ねた。が、化野は、

「まあ、来ればわかるよ」

の一点張り。結局何もわからないまま、学校に着いてしまった。

第一印象はとにかく大きい、だった。というか、途中から学校の外側を周っていただけらしい。曲がり角を曲がったら校門があつた。

第二に驚いたのは、門だった。

警備員がいた。しかも、その腕には腕章が。右側の男は赤い布に緑の字で『火 参』と、左側の男は白地に黒で『特 五』とそれぞれ書いてある。

思わず、香取は一步引いた。

「な、なんで？」

それぞれの意味は、『火種』と『特種』、である。都市にいた頃に見たことがあるので知っていた。数字の意味はわからないが、こん

な警備員を休日、しかも夏休みに配備しているなど、どうみてもまともではない。

しかもそこに、化野は普通に入っていく。

「どうしたの？ 早く来なよ！」

警備員は普通に通していたが、その圧力は恐ろしい。

異伝子が世界で確認されてから、犯罪者数は一気に減少した。それは、他人が見た目で判断できなくなったからだ。肉体的にも弱そうな老人ですら、昨日のように恐喝未遂すらできてしまう。

だからこそ、その中で更に警備員という『武力』が必要な仕事についていることが恐ろしい。

香取は立ち尽くしてしまった。普段から自分の異伝子を極力使わないと誓う身からすれば、危険極まりない。

だが、どうやら見兼ねた警備員が話し掛けてくれたことで場は解凍された。事情を説明すると、入校証を付けることを条件に許可が降りたのだ。

「ありがとうございます……」

微妙に緊張しつつも、門を通る。だが中に入ると同時にそれは吹き飛んだ。

「う、わあ……」

目の前に広がったのは、一面の庭園だった。夏らしく向日葵が何本も塀に沿うように並び、何故か秋桜と桜が上下に咲き誇る庭には煉瓦敷きの通路が。

「凄いでしょ！　これ、緑化委員会が手入れしてるんだよ！」

「凄い……けどちょっと待って。なんで秋桜と桜と向日葵がいつしよに咲いてるの！？　おかしいって！」

思わず香取は突っ込んだ。しかもよく見ると変だ。一応屋外なので、風もある。だが、草木は葉の一枚すらも動いていない。完全に、異常と言っている。

「なんか全部止まってるし……」

というか、触ってみたらやけに固い。硬い、ではなく固い。まるで『時間が停止している』かのようだ。

「……なんなんだここは……」

敷地といい門といい庭園といい、あまりにも規格外過ぎる。

「大丈夫なんだろうか……」

「ぼんやりしないの！　ほら、行くよ！」

波乱を含んだ学園見学会が始まった。……始まって、しまった。

3rd この町の案内

学園内部は閑散としていた。やはり夏休みだからだろうか。香取は当たりをつける。

「そういえば、クラスはもう決まってるの？」

「ええと、確か…… Aだったかな？」

化野の言葉に用紙を思い出しながら、香取が目を向けるとちょうどそこがAクラスだった。

「……なるほど。私と同じだね！」

なぜか微妙な間があったが、香取は気にせず教室へ踏み込んだ。教室は意外に小綺麗で広く、机は三十と平均より少し少ない。リノリウムの床は上履きに心地よい感触を伝え、ここが新天地だという実感をくれた。

「意外に広いでしょ？」

「うん。向こうとは大違いだ……」

一番後ろ、廊下側の席に座ってみる。黒板がまず見えて、次に時間割が見える。そこで、香取は奇妙なことに気付いた。

「ねえ、化野」

「何？」

「時間割の中の、『実技訓練』て何するの？」

その見慣れない科目は、体育と同じように週に三回取り入れられていた。

そしてそれに背後から、全く知らない声が応えた。

「それは、実技と称した『能力強化』だ。模擬戦をしたり、能力の研究をしたり、地道な訓練なんかをやるのだよ」

いつの間にか、反対側の引き戸の所にヒゲ面の男が立っていた。男は、熊のような巨体を軽く動かしこちらに挨拶をする。

「初めまして。守屋もじやという。君が今度来るといふ転入生か？」

「あ、はい……香取健一です。よろしくお願いします」

香取は思わず気おされてしまう。体育教師顔負けの筋肉質が、気配を悟らせないままそこに立っていた。その腕には、『特 参』の腕章が。

「うむ、よろしく。このクラスの担任は私だ。学年主任も兼任している。何かあったら私に尋ねなさい」

そう言って、右手をこちらに差し出してくる。そうなの？ と香取が化野に目でたずねると、頷きが返ってきた。立ち上がって守屋から伸ばされた握手の手を握り返す。見た目に違わない力強さだった。

「化野は付き添いか？　仲のいいことだ。だがな、腕章は着ける」

しまった、とばかりに注意された化野は慌てて香取の座っていた机から腕章を取り出した。腕章には、『特　壱』とある。それを化野が腕に着けるのを見て、守屋は満足気に頷いた。

「というか、ここ化野の机だったんだ。ごめん、勝手に座って」

「い、いって！　その……迷惑、じゃないし……」

「そ、そう？　ありがとう」

なんとなく微妙な空気。それを変えたのは、蚊帳の外の守屋。

「そうだ香取、君にも明日同じ腕章を渡そう。数字は省かれるがね。君は何種だ？」

「火種です。……ええと、何なんですか、この腕章の数字って」

思い切って香取は尋ねてみる。守屋は特にためらうことなく答えてくれた。

「なるほど、確か君は外部転入か。知らないのも無理はないな。この数字はこの町独自のシステムでな。単純に異伝能力をランク付けしたものだ。上は壺から下は十まである。まあ、あまり深刻に考えなくともいい。ランクで特に変わるものは無いし、成績に関しても考慮はされないからな」

「へえ……」

なるほど、と香取は納得する。そうすると、門にいた警備員は相当なつわものというわけだ。そこまで理解したところで、香取はふと気になった。

「あれ？　そうすると、能力のない生徒はどうなるんですか？」

すると、守屋が一瞬キョトンとした顔をした。だが数秒で表情を戻し、化野に尋ねる。

「化野、言つて無かつたのか？」

「……はい。忘れていました」

申し分けなさそうに化野が言う。ちつとも理解できない香取は首をかしげるしかない。結局、口を開いたのは守屋だった。

「……この学校、いや、町にいる人間は全員異伝子保有者だ。だから、基本校内でそういった問題は有り得ない」

「……………はい？」

香取は、絶句した。

「私も、異伝子保有者でな。『重層歩兵軍』ファリンクスと呼ばれているのだよ」

「ちなみに私は『千変万化』シェイフシフターって呼ばれてるんだ」

香取の空いた口は、しばらく塞がらなかった。

異伝子保有者の生まれる確率は、そんなに高くない。一番数の多い

火種でも、十人に一人。特種や禁忌種のようなレアなら、百人に一人の割合だ。一部の例外を除いては。

そんな中でこれほど巨大な都市の市民、学園に在籍する学生が全員異伝子保有者となると、故意に集めたくらいしか理由が浮かばない。

（そういえば、転校の時にも……）

異伝子保有者については別途相談、という学校が多いのに、この学園だけは何も無かったことを香取は思い出した。

「……もしかして、この学園は……？」

「うむ。気付いたようだな。この街は巨大な実験場だ。異伝子保有者のみの社会のテストケース。学園はその縮図、さしずめプラスコといった所か」

なるほど、と香取は頷く。こんなコンセプトで出来た街なら、あんな転入の案内も納得がいく。

「それに、わたし達みたいなガーディアン守護役もいるの。だから、都市内部は大体平和なのよ？」

「ガーディアン守護役……？」

いきなり出て来たゲーム脳的な単語に香取は内心でため息をつく。正直、香取の頭のキャパシティは今の時点で一杯一杯なのだが。

「……とりあえず説明をお願い、化野。そのなんか凄そうな組織について」

香取は腹を括る。この先ここで生活するのだ、知識は多いほうがいい。

化野の説明を要約すれば、守護役とは一般の学園で言う風紀委員の代わりらしい。ただし、任命に関してはテストが課せられそれに合格しなければならず、しかし合格さえすれば外部で言う警察と同じ権限が与えられる、ということらしい。

「……っと。こんなところかな？」

尋ねられてもわかるはずもないので、守屋に目線を送ると頷きが返った。

「ありがとう。……ところで、そこまで詳しいってことは化野も守護役なの？」

香取は腕章を見ながら尋ねる。一級、ならば学園側としても遊ばせる人材ではないだろう。しかも珍しい特種でもある。

「うん。一応ね。一級ってこの街に十人くらいしかいないからもう大変だよ……」

ということは化野はこの街の十本指の一つなのか、と香取は感心しながら守屋に尋ねた。

「このランクって、どうやって決めるんですか？」

「うむ。授業内の模擬戦で決める。詳しいことはまあ、授業中に説明しよう」

「分かりました」

楽しみにしているといい。といったげな笑顔をする守屋に対して、香取は若干引きつった顔で返した。

（何をやらされるんだろうか……）

と、そこで守屋のポケットから騒がしいメロディが。どうやらメルが届いたらしい。

「……む。済まない、急用ができた。できれば校内を案内したかったんだが、どうやら無理になったようだ」

そう言つて香取達に背を向けたその時、今度は化野の携帯が鳴った。慌てて取り出した化野の表情が固まる。

「まさか、化野もか？」

守屋の問い掛けに、化野は頷いた。

「ど、どうしよう？ 健の案内をしたかったんだけど」

すると、守屋がおもむろに教卓の中から八枚折りの紙を取り出した。

「地図がある。味気はないが、これで我慢してくれ」

香取が渡された紙を開いてみると、確かに地図だった。まるでテーマパークのパンフレットのような。

「ごめんね。最後まで案内したかったけど、できないみたい」

謝る化野に香取は、

「気にしないでよ。お仕事みたいだし、しょうがないって」

そう言つて、地図を手にして立ち上がった。

「では化野、行くとしよう。どうせそちらも『アレ』だろう？」

「てことは、先生も同じ用件ですか……ああもう、面倒だあ！」

愚痴のような文句のような台詞を残して、化野はなんと窓から飛び出して行った。

「うむ。二階くらいならば私も行けるか」

続いて守屋も窓から行った。残された香取は啞然として見送るしか無かった。

しばらく自分がこれから通う学園の理不尽さを感じた後、彼もまた、校内の探索に戻ることにした。

4th 禁忌の少年少女

「さあで、と！」

香取は、地図を頼りに探索を再開した。確かに広い学園だが、地図があればなんとかかなりそうである。

どこから行こうかと悩んだ挙げ句、外側から回ることにした。この学園は内周部分に特別教室が集中している造りになっているため、外周部分は教室ばかりだ。時間短縮のためそちらを先にした。

手早く教室棟を見て回る。やはりというか何と云うか、同じような部屋ばかりでつまらなかった。ただ、どの部屋でも窓が防弾ガラスになっていた辺り戦慄せざるを得なかったが。

（校内で能力の小競り合いでも起きるのかな？）

よく見れば、引き戸のガラスにさえ飛散防止フィルムが貼ってある。学園側としては、最大限生徒の安全性は保障したいのだろう。

彼の目にとまる物があつたのは、外周と内周を繋ぐ渡し廊下からふと見下ろした中庭だった。いや、者と言うべきか。

（ん……！？）

時間が停止したかのような中庭のベンチに、一人。香取と同じ見事な白髪を長髪にした女子生徒がいた。読み差しなのだろうか、小説を傍らに置いてぼんやりと中空を見上げて物思いにふけているように見える。まるで喪服のように飾りの無い黒い服を着ているその

手には、香取とこれまた同じ白い手袋が。香取の手袋は火傷の保護のため少々厚い生地を使っているが、その少女の手袋は日除けのためのもらしく生地が薄く、半袖に合わせているのか肘までの長さになっていた。肌自体がそもそも白いのとあいまって、見た目はまるで陶器で出来た人形のようなものである。

ある意味、自分と似た少女。気になるが、しかし見知らぬ人に声をかけるのはばかられる。第一、上から声をかけたら驚かれるだろう。

（学生……だよね？）

年代は同じくらいなのだが、校内なのに私服だった。学生ならば先程の化野のような制服のはずなんだろうけれど。

よく見れば、彼女も腕章を着けていた。そこには、『禁 式』とある。

それを見て、香取はすぐその場を立ち去る決意をした。

禁忌種に扱われるのは大抵『制御不能』か『無差別』の特性を持つ。中には、目線が合っただけで石になる、などという神話の化け物じみた能力者までもいるらしい。巻き添えは勘弁だ。

（なんか、この街に来てからよく逃げてる気がする……）

情けないことを思いながらも、香取は速度を上げる。異伝子で強化された身体は容易く中庭を背景の一部にした。異伝子保有者の平均速度は、百メートルを三秒とされている。当然、床に与える力もそれなりだろうが、校舎は余裕をもって耐えてくれた。校舎自体がかなり頑丈になっているのだろう。

ふう、とため息をついてから、香取は校内の探索を再開した。

「……先生。これって？」

香取が校内探検を再開した頃。市街地では化野と守屋を含む守護役が数人、集まっていた。先程救急車に青年一人が乗せられて運ばれていった所だ。

「おっさんが搬送されただけだあな。パニックになっちまった市民が慌ててアタシら呼び出したらしい」

「ああ、坂崎さん」

二人に話し掛けたのは、見た目三十程度のおばさんだった。坂崎沙江さかざき さえと言う熟練の守護役で、その年季からこの区画のリーダー的な存在である。

「なるほど。それじゃ、用件自体は大した事ではないというわけですね？」

守屋が返事を返す。周囲に集まっていた他の守護役も、その言葉と坂崎の頷きに表情を緩めた。

「極端に衰弱してたのがちよいと気になるけど、病院行けば平気やね。」

さあさ、解散解散！ 後の処理はアタシと守屋がやっておくから、各々自分の仕事に戻んなさいな！」

パンパン、と手を高らかに鳴らして坂崎が言う。

勝手に巻き込まれた守屋も坂崎には一目置いているので、渋々とメモ用に手帳を取り出した。

「それじゃ、先生。私はこれで」

化野は自分はいらないと判断して、踵を返した。

「ああ。私が言うのも何だが、気をつけて帰るといい」

「わかりました」

（さて、健の所にもどらなくちゃ！）

ぐぐつ、と足に力を込める。同時に、『こう在りたい自分』を強くイメージする。イメージの強さが一定を越えたら、後は身体が勝手にそれを実現する。

イメージに依存する変身能力。これが化野の『変幻自在』シェイプシフターの性質だった。

軽く地面を蹴る。それだけで、午後の空に身体は舞っていた。近くのビルの屋上に着地して、屋上伝いに学園を目指す。

異伝子保有者特有の馬鹿げた身体能力を更に強化、操作でき、場合によっては人間以外にも変身できる。特種の異伝子保有者は『変化すること・させること』に特化しているが、特種で番号に指定されるのは彼女と後一人だけだ。

まさにあっという間に化野は学園の屋上に到着した。

ちようどよく、香取の姿も見える。中央棟の屋上で、彼は空を見上げていた。

手を振ると、気付いてくれたのか手を挙げて返事を返してくれる。彼女はもう一度、屋上を蹴った。

「ふう」

香取は、中央棟の屋上に登っていた。私服が風で騒がしく暴れるが、気にせず彼は手摺から身を乗り出して下を見る。

落ちたら死ぬのかな、と思う。死んだら楽になれるのかな、と思う。

……右手を見た。

（意味が無いって、わかってるんだけどね……）

そしておもむろに、鉄の手摺に傷口を叩き付けた。

「……！」

開いた。血が溢れ、手袋が赤く色付く。痛みはあまり無い。というより、そこだけが鈍くなっていた。十年間、焼いたり潰したり切ったり刺したりしてきたのだ。当然とも言える。痛くなくなったら、もつと痛くなるように傷つけてきた。だからというか、今はもう感覚すら鈍い。視覚から来る条件反射で声だけは出るが。

だらだら垂れ始めた血を、やるせなく見つめる。赤。赤。赤。赤。思い出すのは、かつての風景。

僅か五つの自分が人を殺しかけたという、思い出したくもない思い出。

そう。化野育美の腹部に、確実に肝臓と脊髄を貫く勢いで、刃を刺したという、彼の全ての原点で終点でトラウマでもある思い出だった。

と、視線を感じて見上げた空から目を外すと、ここ数日で見慣れた影が手を振っているのが見えた。返事代わりに手を挙げて応える。そしてこちらにジャンプする彼女に場所を開けるために、手摺から離れた。

「おかえり。……でいいよね？」

「うん。ただいま！ で、どう？ どこまで見れた？」

「一通りは。中庭だけは誰かがいたからまだだけどね」

互いに言葉を交わす。ふと、化野が香取の手に気付いた。

「どうしたのそれ！ 真っ赤じゃない!？」

「あー。うん。そんなに慌てなくていいよ。ちよつとぶつけて傷口が開いただけだから、しばらくすれば止まると思う」

ささつ、と香取は隠すように手を後ろに回す。それを化野は、

「大丈夫じゃないって!」

言って、追う。そして、化野が香取の手に触れた瞬間、思わず彼は鋭く叫んでしまった。

「触るなっ!」

余りの剣幕に驚いた化野は、すぐに手を離す。その顔には、不可解と困惑と……僅かな、恐れが見えた。

「あ…… その、悪い」

香取はすかさず謝った。さすがに過剰に反応し過ぎてしまったと反省する。

「う、うん。ちょっとびっくりしたけど……でも、保健室には行く？　消毒くらいはしたほうがいいと思うの」

化野は、まだ香取の手を気にしながら言った。言葉こそ疑問の形をとっているが、連れていくぞ、と今にも手を引きそうである。

「うん、わかった。さすがにそれくらいはするよ」

確かこの棟の一階にあったはずだよね、と言って去る香取に化野は少しだけ、違和感を覚えた。

何かがほんの少しだけ、けれど致命的にずれているような、そんな違和感。

けれど、彼女は内心で首を横に振った。

（このズレも、きっと埋まるよね？　これからずっと、近くに居られるんだから……）

想う。思うではなく、この字だ。

十年越しに再会できた恩人で初恋の人なら、それが正しい。はず。

ふと気付くと、先に校舎に入った香取が戸を手で押さえて開けたま

ま、どうしたの、と聞いたげに彼女を見ていた。どうやら物思いは彼女が彼と居る時間をかなり減らしたらしい。もったいない、と思いながら、化野は香取に駆け寄った。

5th 心当たりの保健室

保健室で、香取は適当に傷を処置する。開いた傷口はそんなに大きくはなく、血を拭いてから消毒液を吹き付けて、軽くガーゼを当てるだけにした。

一方、血が付いた手袋は化野が流水に晒してくれていた。汚いから自分がやると香取は言ったのだが、私にもなにかさせて！と言われてしまえば仕様がな。まさか傷口を彼女に見せられるはずもなく、手袋の方は彼女に任せるしなくなってしまった。

大きめに切ったガーゼを当ててテープで固定しようと香取が四苦八苦していると、暇を持て余した化野が話し掛けてきた。

「そういえば健が見た人って、どんな人だったの？ 夏休みに学校に人がいるって珍しいよね」

「あー、でも、私服だったし生徒じゃないのかも？ いやでも、背格好は化野くらいだったし……」

よく考えてみれば、その少女の印象はかなり薄い。だが、香取は一つだけ、強い印象を思い出した。

「そういえば、白かったな……」

「……？ なにが？」

ゆらり、陽炎のように頭の中から記憶が蘇ってくる。印象的な、白く長い髪と手袋。

「ええとね。今の化野とは逆で髪が長くて真っ白だったんだよ。しかもなんて言うんだっけアレ、アームウォーマー？　まで白でさ」

さすが『千変万化』というべきか、今の化野は明るい黒のショートで、最初に駅で会った時とは違っていた。本来の彼女はこちらで、駅でのロングヘアは、こちらに分かりやすいようにと配慮した結果だそうだ。子供バージョンで来ていたため余計なトラウマまで呼び起こされたが。

「白い髪、ね……　　っていうか健も白いよね。染めたの？」

さり気なく伸びてくる化野の手を躲しながら、香取は否定した。

「いや、これは……　　いろいろあったのさ。向こうで」

もちろん、染めた訳ではない。試しに抜いて陽に透してみればわかるが、毛そのものが弱って細くなり色素が抜けたための髪色なのだ。つまりは、ストレス性の脱色作用。かつてある王妃は、処刑までの一日で毛が真っ白になったという。まさか自分で証明する羽目になるとは思わなかったが、それは真実らしい。

まあ、それは置いておいて。

「で、どう？　　化野は見覚えがありそう？」

香取の問いに、彼女は首を捻って。

「わかんない。やっぱり顔を見ないと……」

「あ、やっぱり？」

そういえば、と香取はもう一つだけ思い出した。あの腕章のことだ。

「そういえばあの人、禁忌種の腕章を……」

「禁忌種？」

途端、化野が食いついてきた。何かしら思い当たる節があったのだろうか？

「禁忌種で、ランクは？ やっぱり、弐？」

「う、うん。確か弐だった……」

思い当りでもあるの、と香取が尋ねると、彼女は珍しく言葉を濁した。

「うん…… その、多分悪い人じゃないから、できたらでいいから、仲良くしてあげてくれると嬉しい…… かな」

どうやら知り合いではあるらしい。どんな人物かは香取にはさっぱり見えてこないけれども。

「う、うーん？ まあいいや。で、手袋はどう？ 色は薄まった？」

晒したままの革手袋の様子を尋ねる。素材が素材なのであまり水はよろしくないからだ。

「あ、うん。だいたい血は取れたと思う」

水から引き揚げて、軽く振って水を切る。革なので乾きは早い、念のためタオルで拭いて貰った後でポケットに入れる。

「これでよし……と。で、化野はこの後どうするの？ 僕は一通りは見学したから帰るつもりだけど」

そう言う彼女は微妙に残念そうな顔をした。

「うーん、できたら学校案内をしてあげたかったんだけどなあ。しようがない、それじゃ私も帰ろうかな。学校にもう用事もないし」

「そうなの？ それじゃ、途中までは送るよ。学校案内のお礼にはちよっとそぐわないけどさ」

もちろん、昼食のことを忘れているわけではない。ただ、香取の意識にこびりつく罪悪感が彼に言うのだ。

償え。と。

だが、彼には方法がわからない。逃避として自分を傷付けたところで、何の解決にもなっていない。

せめて彼女に何かしたいと思うが、もはやそんな資格さえあるかわからない。

ならせめて、離れ気味の友人としてここにいようと彼は思う。自分が彼女にした真実をいずれ話したとき、どんな関係にでも変化できるように。

例え絶交されても、友人ならそう心は痛まないだろう。突然消えたとしても、ただの友人ならいずれ記憶の片隅に埋もれ忘れ去られる。

そうではなくては、ならないのだ。彼女の平穩の為に。

……逃げだとはわかつている。しかしこの十年、方法を彼はずっと捜し続けたのだ。手当たり次第に分厚い医学書を読み漁り、異伝子についての博士論文を辞書を傍らに目を通し、自分の能力を自身を実験台に文字通り必死になって理解し制御の訓練を続けてきた。結果、皮肉にも彼の能力は研ぎ澄まされ、ほぼ完全に支配下に置けるようになった。彼にとってちつとも嬉しくないことだが。

死んで償えるならすぐにでも彼はそうするだろう。だが、それだけはないようにしている。未来の可能性だけは、捨てられないからだ。

「ううん、いいよ。私もちよつと用事があるし。……ついて来たらダメだよ?」

なぜか香取から目を逸らしながら化野は言う。その様子から、香取は素直に身を引くことにした。

「わかった。気をつけてね」

「大丈夫よ! これでも私は守護役なんだから!」

化野と校門で別れる。自分の家とは反対側に走る彼女を見送りながら、香取も歩き出した。

香取は家に帰り着く。道中それとなく携帯を捜してはみたものの、結局見つからなかった。誰かに拾われたのかもしれない。先日からトラップが仕掛けられたままの玄関をモはや慣れた様子でぐぐり抜けて、彼は家に入った。

「ただいまー」

誰もいない。分かりきっているが。
キッチンに書き置きもなく、どうやらまだ母親は帰ってきていないらしい。

「…… 寝よう」

やることもないし、と思ったら、思い出した。

「晩ご飯作らないと……」

どうせ母親はアテにならない。香取は冷蔵庫を覗きこんだ。

結局、香苗は寝るまで帰って来なかった。

6th 歓迎の教室

転校初日の朝。別に高校デビューだとか第一印象の操作とかを全くする気のない香取は、それなりに模範的な服装で登校した。

転校生は職員室に寄るために登校が早い。相変わらずの革手袋と目立つ白髪に奇異の視線を向けられながら（ただし一切本人は気にせず）、香取は職員室に守屋に伴われて入った。

「さて、香取君。君は今日からこの学園の生徒になる訳だが、何か気になることや疑問点はあるかね？」

職員室には、教員が既に何人かいた。自分の仕事に集中している人も居れば、こちらをちらちらと見ている人もいる。香取が特にないことを頷いて表すと、守屋は机の引き出しを開けながら言った。

「ふむ、ならば良し。生徒手帳は持っているかね？」

言われるまま、転校の書類に同封されていた手帳を差し出す。守屋はその中身を抜き取り、外側を机から出した緑色のカバーに取り替えた。

「君の個人情報登録されたチップを埋め込んである。無くさないようにしたまえ」

外装だけ新しくなった手帳を受け取り、荷物から必要な書類を提出。それらの細々とした用事を片付けるうちに、いつの間にか校内がにわか騒がしくなり、しばらくしてからまた静かになった。どうやら体育館で式を行っているらしい。

「簡単な自己紹介でも考えておいてくれ。うちのクラスは個性的なのが多いから、気圧されないように。了解したらついて来い」

基本的に有無を言わせないのが守屋のスタンスのようだ。言い換えれば、それくらいでないとどうにもならないレベルの奴らがクラスにそろっている、ということか。『壺』である化野が在籍するのもそれらに対する抑止力かもしれない。

守屋の高圧的な態度をそう理解した香取はなるべく当たり障りのない自己紹介を考えながらついて行った。

そして、階段を登りAクラス前に到着。Aクラスだけ階段を挟んでいるので、さして他のクラスに見られることはなかった。

「待っていたまえ。中から呼ぼう」

「わかりました」

守屋の言葉通り、鞆片手に廊下で待つ。耳を澄ませば、中では「転入生だってよ!」とか「女か?! なんだ、違うのか」と、半ばお約束な会話が聞こえてきた。思ったよりは普通だな、と警戒心を緩めたところで、守屋からの呼び掛けが。

(まあ、適当に……)

挨拶をして終わらせよう、と木の引き戸を開けた直後。

彼は気を緩めたことを後悔した。

香取の視界に入ってきたのは、サッカーボール。ただしそれはかな

りの慣性を受けており、しかも彼の顔面に直撃する軌道をとっていた。

（しまっ……！）

彼がそう思ったのは、ボールに対してではない。

反射的に発動してしまった制御の効いていない自分の能力に対してだった。

視線に、刃が乗る。それはサッカーボールを弾けるような風切り音をたてて真つ二つにすると同時に、その向こうの壁にナイフ一本分程の厚みの斬撃跡を鈍い削音で刻んだ。

「……すげえ」

一瞬だけの沈黙。次に漏れたのは誰かの感嘆だった。そしてその後、一気に興奮が爆発した。

「一撃かよっ！」

「アレ、河合が固めた奴だよな?!」

「投げたの誰だよ?」

「田中だよ。顔面コースだったし」

「壁まで決れてるぜ、オイ……」

そして、止まらない騒ぎに対して静かな命令が響いた。

「全員……黙れ」

教卓に立つ守屋の一言で、おしゃべりが一斉に止まった。いや、興

奮は収まっていけない。密かに会話は続いていた。しかし守屋はそこまで咎める気はないのか、啞然として入り口に立ったままの香取を手招く。

「いささかイレギュラーなことになったが、紹介しよう。香取健一だ」

守屋が黒板に大きめに名前を記す。

「親の都合で転勤してきたそうだが、出身はここだ。皆、仲良くするよ」

そう言つて、香取の背中を軽く叩く。

「香取健一です。よろしくお願いします」

考えていた挨拶もまとめて吹っ飛んでしまったので味気無い挨拶になつてしまった。そして下げた頭を持ち上げ、改めてクラスを見渡した時、香取は違和感を三つ同時に見た。

一つは化野だ。他は興味津津な目線をしているのに、彼女だけは歓迎の笑顔。顔見知りなのだ。これはまあいいとしよう。

二人目に違和感を覚えた女子はこちらに興味がないだけらしい。じつと外を見つめている。ただ気になるのは、自分と同じ白い髪だということか。もしかすると、とその先に思考を進める前に最後の一人に気付いた。

男子だ。整つてはいるがなんとなく粗野なイメージが浮かぶ。そして直感する。彼が抱くのは興味でも無関心でもない。

明確な敵意だ。

初対面のこちらに対する。

「さて、香取。君の席は…… ところが空いてる？」

守屋の言葉で思考が現実に取り戻される。「夢見の隣りが空いてます」と声がして、守屋が目を停めた。

「そこか。よし香取、君の席はあそこ…… 廊下側から二列目の席だ」

指先を追って香取は気付く。つい先日、初めて守屋と会った時に座っていた席の隣だということに。

つまり隣の席は化野だ。守屋の心遣いをありがたく受け取りながら席について化野に視線を送る。

化野は笑顔を返してくれる。香取は鞆を引っ掛けて着席した。反対側を見ると、こちらを完全に無視する女子が。彼は気付く。彼女は『二人目』だった。

「よし。朝のホームルームを終わる。今日は掃除だけだな。後ろに分担表が貼ってあるから各自見て移動しろ。以上だ」

それだけ言って守屋は去る。直後、香取の周囲に黒山、とまではいかないものの一気にクラスのほとんど全員が集まった。

いや、完全に囲まれている訳ではない。夢見、と呼ばれた少女の側だけ欠けている。

（避けられてる？）

奇妙に隙間の空いた円。だが、気にしている暇は彼には無かった。

「なあ、アレがお前の能力か？！」

「すげえな！　あのボール一応鋼鉄並の硬度に『強化』してあったんだぜ！」

「斬った、ってことは純粋な斬撃か？　いや、形がなかったから指向性の衝撃波？」

質問なのか称賛か解析か、ごちゃまぜになってよくわからない言葉の濁流に吞まれかけたその拍子に、クラス唯一の知り合いが手を差し延べてくれた。

「ちよつとちよつと！　いきなり質問責めにしないの！　健だつて困ってるでしょう！」

化野だった。彼女が立ち上がるだけで、そちらの側の円が欠ける。

「うっせー委員長！」

「やっべ、爆発するぞ！　撤退っ！」

爆弾か何かなのか。散々な言われようである。だが、中には冷静な奴もいたようで。

「健……？　呼び捨てってことは、二人は知り合いなの？」

その言葉に、クラスが水を打ったように静まり返った。そして退散しようとした連中までもがこちらを見つめ始める。

どうやらとんでもない所で質問が統一されたらしい。どうしようか、

と疑問の目線を香取が送ると、なぜか化野は微妙に赤くなって笑顔を返した。とりあえず答えるべきだろう。

「あー、うん。ちょっと変わってるけど、化野とは幼馴染みになるのかな？」

その答えに、クラスが震撼した。

「おいマジかよ？　みたか？　あの鉄壁の女が赤くなったぞ」

「くそう！　意外なところからライバルが来やがった！」

「いや、お前には最初から芽はない」

「ひでえ！」

概ね男子はこんな感じ。……どうやらノリの異様にいいクラスなのはよくわかった。

だが、幾分冷静な女子が動きだした。

「なるほど、育美ちゃんの知り合いなら安心ね。……それより、その髪の毛って……染めてるの？」

「いや、いろいろあってね。色素がほとんど無くなったみたい。ほら」

香取は髪を数本引き抜いて見せる。陽の光を透して見せる白色に、おお、という声と共に皆が注目した。

そして、彼は気付かない。夢見、と呼ばれた少女が異常なほど熱心にその様子を見ていたことに。

「じゃ、じゃあ、その手袋は？　外していい？」

初対面なのに人懐っこい人もいるらしく、いきなり女子に手を握られた。痛覚は鈍ってこそいるが無くなった訳ではなく、僅かに走る痛みに顔を歪める。

「あ、ごめん」

気付かれたらしい。

「だ、大丈夫。ちょっと火傷しちゃってね？　他人に見せられなくなっちゃってるから手袋してるんだよ。できればあんまり触らないで欲しいな」

「はい、気をつけマス……」

いろいろ有りつつも、彼の新しい学園生活がこうして始まった。

7th 脅迫の三人

散々質問責めにされた後、香取は解放された。彼の掃除場所はどうやら教室だったらしく、化野が箒を手渡してくれる。

「どう、うちのクラスは？」

「……ノリがいいのは充分理解できたよ」

「あははっ！ 初日ならしょうがないよ」

受け渡された箒で適当に掃除しつつ、化野と香取は会話する。

「けど大変だったね？ いきなりあんな物ぶつけられそうになつてさ」

「サッカーボールのこと？ あれはびっくりした…… あのボール、何か細工がしてあったの？」

ボールを断ち切った自分の能力を棚に上げて、香取は尋ねる。化野は苦笑いしながら答えてくれた。

「アレは、ね。河合君の『石化』ストーンナイズで固めて田中君の『座標転移』ポイントムーヴでぶつけようとしたみたい。私も止めようとしたのだけど……」

間に合わなかったの。と化野は申し訳なさそうに手を振った。

「なんて傍迷惑な……」

「あー。うん。それは…… うちのクラスの通過儀礼みたいなもの
だと思って」

「物騒だね……」

気落ちしつつ香取も手を動かす。人手は多いので案外早く終わった。

そして、ホームルームもつつがなく終了。荷物を纏めていた時、彼
に話し掛けてきた集団があった。

「よ！ 転入生」

生真面目そうな眼鏡、軽そうな茶髪、大柄なマッチョというどつに
もアンバランスな三人組。

話し掛けてきたのは、茶髪だった。

「こんにちは。何か用？」

「何か用って…… オイオイ、自己紹介くらいさせろっての」

すげない香取の返しにめげることなく、茶髪は頼んでもいないのに
勝手に自己紹介を始めた。

「俺は田中。たなかたいし田中泰志だ。で、隣のメガネが谷原啓、たにはらけいデカいのが河
わいゆうじ合裕司な。以後よろしく、というわけで……」

そこでなぜか田中たちは一列に並び、

「すまんかった!」

「悪かったな」

「悪い……な」

謝った。

「……はい?」

いきなりの謝罪に香取が目を白黒させていると、眼鏡……谷原が顔を上げた。

「あのサッカーボールを投げたのは、私たちだ。理解できたか?」

言われて香取は納得する。そういえば、河合と田中の名前には聞き覚えがあった。

「ああ、君達なの。いい気にしないで。通過儀礼みたいなものなんでしょう?」

「そうは言っが……一応……な」

巨漢……河合が口を開いた。どうも聞き取りにくいが、なんとかなる。

「で、だ。俺と河合の合作を叩き斬ったお前に頼みたいことがあるんだよ」

そう言ってくる田中の顔は、悪戯好きな子供の顔だった。香取の経験則上、こういった連中に関わると楽しいがろくなことにならない。

先制で断ることにした。

「君、厚かましいって言われたことない？ 自分からちよっかい掛けて許されたからってそれはないよね？」

刺含みの言葉。田中も自覚はしているのか、言葉に詰まる。

「用件はそれだけ？ だったら僕、用事があるし帰りたいんだけど」

帰ろうとする香取を押しとどめたのは、谷原と河合だった。

「まあ待て。話くらいは聞いてくれてもいいだろう」

「強制は……しない」

そう言いつつ、河合がその巨体でドアの前に立ちはだかる。話を聞くまで通さないつもりらしい。

「強引だね。強制との違い、わかってる？」

「当たり前だ。強制とは当人の自由意識を尊重しない。強引とは当人の自由を尊重する。まあ、その意識を擦じ曲げれば同じだがな」

「擦じ曲げてる自覚はある？」

「無い。君ならば河合を斬ってしまえばいいのに、そうしないのはこちらとの会話に興味があるということだ。そうだろう？」

「他人を斬って放置しようとする趣味は無いつもりだったんだけど

なあ」

この谷原という奴、思考がぶつちぎりバイオレンスらしい。……真剣にこのクラス、『掃き溜め』のような気がしてきた。

危険思考や素行不良などの問題児を掻き集め、貳位の教師守屋と壹位の化野で無理に纏めあげる。この中の香取はさしずめ、投げ込まれた小石か。どんな化学反応を示すかは不明の暗黒物質ダークマターでもあるのだろう。

「いろいろと面倒そうだね……」

問題事に巻き込まれるのは必定な気がし始める香取だった。

「了解、って受け取るぜ。その返事」

なれなれしく肩に田中が手を置く。それを振り返ることで払いながら香取は言った。

「言っておくけど、そのお願いを聞くことはないと思ってね。いきなりクラスで目立ちたくないから」

釘は刺しておく。まあ、聞くだけならタダだ、と香取は自分を納得させる。

「ああ、無理にとは言わないさ。

お願いってのはな、明日の能力強化授業、あ、実技訓練な。で王丈おつじょうってクラスメイトに勝って欲しい……それだけさ」

「……はい？」

思わず香取は聞き返す。それくらい意味不明なお願いだった。

「クラスメイトを、負かす？ 何のために？」

「ああいや、何も殺せつて訳じゃない。ただ、あいつのプライドをブツ壊して欲しいってことだ」

「……その必要性は？」

「俺らの心の平穩の為にさ」

余計に意味がわからなくなった。

「はあ。まあ、勝手にしなよ。僕は昼行灯、平和主義の役立たずさ。アテにしないでおいで。それじゃ」

切り上げて帰ることにする。だが、まだ戸の前には河合が立ちはだかつていた。

香取はふう、とため息をついて頭一つ分上の顔を見上げる。

「退いてくれないかな？ 自分にふりかかる火の粉くらいは平和主義者な僕でも払うから……斬るぞ」

右腕を持ち上げ、指を合わせて鳴らす寸前にする。もちろん能力を使う気はないが、彼らがこんな頼み方をする以上脅しにはなるはずだ。

「……わかった……ただ、嫌でも……お前は王丈とやり合うことになる……」

「君の能力は『予言』か何かなのかい？　そうじゃないなら、その言葉に意味は無いね」

早くどけ、とばかりに香取は左手も同じように突き付ける。

「王丈は既に貴様に目をつけている。大方、貴様を指名するだろう。だからこそその河合の言葉だ」

右側から谷原が言葉を挟む。

「それに、脅迫されているのは貴様だ。三対一、能力も知らずに勝てるとても？」

谷原の呼び方が『貴様』になった。どうやら相当頭に来ているらしい。

香取は右手を谷原に向ける。

「田中が硬化、河合がベクトル固定。谷原君、君はわからないがあのボールに何もしていないなら君の能力は戦闘系じゃない。腕章からでもそれは分かるさ」

田中は『火 四』、河合は『特 六』、そして谷原は『特 五』。と、それぞれの腕章を見ながら香取はいう。

仲間の能力を見抜かれたことに谷原が驚いた顔になる。それを見て香取は更に言い募る。

「さて、これで君達の優位はほとんど消えたね。ちなみに、僕は向

こうでは火種だった。それに、ボールを斬ったあれが全力だとしても？　言っておくけど、僕はこの体勢からアンタらの内二人の首は胴体とサヨナラさせられる……田中君と河合君をどうにかすれば、君は口煩いただの小羊だ」

そこまで言って、香取は谷原に向けていた手を背後の田中に突き付ける。ごくり、と田中が緊張から唾を飲む音をバックに改めて河合をにらみ付ける。

「さて、最後の警告だ。……どけ」

遂に、河合が退いた。その表情に恐怖を滲ませて。

「ありがとう。それじゃ、また明日」

おののく彼らと香取を断絶するように、引き戸は閉められた。

8th 後悔の午後

ふはー、と昇降口を出た香取は大きくため息をついた。

（やつちゃった……）

もちろん、さっきの教室でのことである。あの場には、他のクラスメイトも少なからずいた。間違はなく香取に対する彼らのイメージは激変したはずだ。

あまり目立ちたくない、地味派の香取としては歓迎できない事態だった。

（それに……）

例え僅かでも、自分が他人をその手に掛ける素振りをしてしまったこと。

それが、許せない。

（……畜生っ！）

思わず香取の右手に力が籠る。傷口がほんの少し開いたのか、指貫グローブの隙間から血が一滴涙のように滴った。

それを軽く手を振って払いながら香取は帰路を歩いた。

「ただいま」

返事は無い。今日も香苗は遅いようだ。

と思ったら、リビングの机の上に紙束が幾つか置いてあった。

（あ、これは……）

異伝子に関する論文だ。今朝母に頼んだ分の、この街でのさかのぼってとりあえず十年分。

香取はヤカンを火にかけてから、六法全書に引けを取らない厚みの論文コピーを手にソファに座る。最初の論文の題名は、『異伝子と先祖返り、それらの類似性について』だ。香取は深海に沈むように読み耽り始めた。

「うん？」

次に香取が初めて自分意外に意識が向いたのは、ヤカンが派手に笛で沸騰を告げた時だった。

「うわわわっ!？」

慌ててとめに走る。間一髪、吹きこぼれは避けられた。

（そういえば、夕食はどうしようかな……）

冷蔵庫を覗く。立派なステーキ肉が見えた。

夕食後。

初日に宿題がある訳はなく、香取はまた論文を読み始める。ヤカンがもうひとつあったので、そちらにもお湯を沸かしておく。

そっちは、懲罰用だ。

手袋を外す。ガーゼはまだ剥がさない。外気に当てて乾かしたほうがいいだろう。その方が痛い。

（あ、あれ……？）

しかし、急速に眠くなってくる。まぶたが重くなり、自然と視界が暗くなる。

（思ってたより……疲れてた……かな……？）

最後にそれだけを考えて、香取は眠りに落ちた。

「……よ……！」

（うん……）

香取は眠りの中で声を聞く。よく知る誰かの声だ。そう思うが、頭の中が霞がかかったようでハッキリとしない。

「……よっと！……」

どうやら、誰かが起こそうとしているようだ。だが、意外に疲れた身体は睡魔に抗えない。

「も…！ ……起き…い…ら、キス…ちゃうぞ！」

待て、と香取の頭に警報が響いた。今ものすごい危険なワードを聞いた気がする！

急速に意識を覚醒。付けたままだった灯に焼かれる覚悟で一氣に目を開くと、

「……あ」

文字通り、目と鼻の先に化野の顔があった。心なしか甘くいい匂いのする吐息がかかる距離を実感して、不覚にも香取の心拍数が跳ね上がる。そして一氣にカラカラになった喉を辛うじて唾液を飲んで潤してから、香取は尋ねた。

「……夜這い？」

その言葉にカキン、と音がしそうな勢いで化野が固まった。

（近い……）

しかし、身体的位置が位置だ。どうやら背もたれからずり落ちたらしい彼の体は天井を向いており、化野はその上に覆い被さるようになっていた。傍から見たら完全に夜這いだろう。彼女の体が影を作ってくれたお陰で香取の目は大丈夫だったが、今度は彼の心臓がピンチである。

(うう……)

死にたい。今更込み上げてきた恥ずかしさもそうだが、

自分の罪を目の前にしてこんな気分になっている自分に対する嫌悪が一番だ。

右手指を鳴らすために構える。自分を傷付ける為なら能力は惜しまない。どうせ今夜辺り焼くつもりだったのだ、斬ることに代わっただけだ。

と思った後で香取は気付く。化野が固まったままであると。困った。手が斬れない。

「……そろそろ退いて貰っていいかな？」

おそろおそろ香取は尋ねる。案の定、真っ赤になって固まったままの化野は反応しない。

(近い……)

二回目。というか更に近付いて来ている気がする。

らちが明かないと思った香取は、強引な手段に出る。両腕を持ち上げ、化野の脇の下、肋骨部分をホールドし(ここで化野が気付いて変な声を上げたがスルー)、一息に押し上げた。

結果香取と化野の上半身は同じタイミングで持ち上がり、化野が香取の膝の上に座った状態で対面することになった。

「ふう。それで、何の用なの？」

思春期には危険な体勢から逃れたことで顔の赤みが幾分か引いた化野に香取は尋ねた。化野はちよつと待って、と言って何時深呼吸をしたあと、香取の膝の上から立ち上がりながら言った。

「香苗さんにね、健がちゃんと晩ご飯食べたか確かめて欲しい、つて連絡が来たの。ほら、健はいまケータイ無いでしょ？ 私も守護役で外に出てたから、ついでにっと思つて来てみたら健が紙の山の中で寝てたから起こそうとしてたのっ！」

後半早口で微妙に要らない説明までくれた化野の言葉に頷いてから、香取は夕食はきちんと食べたことを告げる。

「よかった。なんだったら有り合わせで作ろうかなって思ってたんだよ？」

「料理、できるんだ？」

十年前はそんな機会がある訳もなく、料理ができるというのは初耳だった。

「うん、できるよ！ ……たまに焦がすけど」

後半は聞かなかったことにしようと思つた。だから、彼女の咳きには気付かなかった。

「……特訓、したんだからね？」

「あ、ごめん。何？」

「なんでもないっ!」

「????」

香取は疑問符を頭上に浮かべるが、化野は何も言わない。香取は自分も立ち上がると足元に散らばった論文を適当に一纏めにして台所の机の上に置く。

それから、棚から皿とお菓子を取り出して居間のテーブルに置いた。

「こんなものしかないけど、どうぞ。お茶いる?」

対面に座るよう化野に手で促しつつ言った。化野は大丈夫、と言ってから、きちんと対面に座った。一応地元では名士の家柄だからなのか、姿勢はカッコリしている。

「そついえば…… 健の能力、十年前と変わってないみたいだね?」

化野はそう話題を切り出した。

「変わってないようにみえた? 制御できるように、結構頑張ってたんだけどなあ……」

「ううん。制御、って意味じゃなくて本質がってこと。能力なんて相当な外的心因ショックが無い限り変質はしないけど、やっぱり『あの事件』は私たち二人とをもってショックだったし、変わっちゃってるかなって思ったけどね」

「ショックも何も、僕は心神喪失状態だったんだよ? ショックも素通りしてたさ。……その、化野はどう? 僕が、その……い

ろいろやっちゃったけど」

おそろおそろ香取は尋ねる。返答次第では、彼の十年は無駄になる。それはそれで彼にとつては喜ばしいことだが。だが無情にも、現実には彼を裏切った。

「うつん！　傷もお医者さんがびっくりするくらい早く治ったし、持病の喘息まで治っちゃってね！　傷は多分私の能力のせいもあるんだろうけど、病気のほうはお医者さん不思議がってたよ」

ああ、と香取は全力で顔に出さないようにしながら心の中でため息をついた。

（思った通り、かあ……）

十年が無駄にならなかったことを喜ぶべきなのか、わかっていたとはいえ最悪の状況を嘆くべきなのか。

「……どうしたの？　なんか、凄い汗かいてるけど」

言われるまで香取は気付かなかったが、もし彼を外からみれば相当酷いことになっていることがわかるだろう。まるで熱病に罹っているかのように顔は青く、明らかに尋常ではない量の汗が顎を伝っている。

袖で雑にそれを拭いながら、香取は言い逃れた。

「慣れない環境で疲れて、風邪でもひいたのかな？　うつるとマズいし、化野は一旦帰ったほうがいいかも」

どうする？　と目で尋ねると、残って看病する！　との視線が返ってきた。家に香苗がほとんどいない状態だからだろうか、その申し出はありがたいが仮病であるので丁重に断ることにする。

「そんなに心配しなくても平気だよ。これくらい、異伝子保有者ならすぐ治るし」

すると彼女は猛然と、

「そうじゃなくて！　誰かが居たほうが安心でしょ、ってこと！」

と返す。ならば、と香取は理性に訴える。

「あのね、僕が風邪引くのは別にいいけど、それが化野にうつたらダメでしょうが。一般生徒の僕は最悪何日か休めば済むけど、化野は守護役だよね？」

うつ、と化野が言葉に詰まる。それを見て香取は更に畳み掛けた。

「しかも化野は壱位なんでしょ？　そんなエリートが現場から抜けたら大変じゃないか！　……というわけで、僕としては化野のためを思っ、化野には大人しく帰って欲しいんだよ。……わかって、くれるよね？」

「わ、私のため……」

なんか反応するポイントが違う気が香取はする。

「そこまで言われたらしょうがない、帰るね。何かあったらメールか電話で……って、無くしたんだっけ、携帯電話」

「あー。そういえばそうだったね。ま、もう少し待ってみるよ。探し物って意外な所から出てくるようなものだし」

あつさり態度を変えた化野に少しばかり奇妙さを覚えるが、香取は都合が良いので深くは考えなかった。

「玄関までは送るよ」

そういった香取はゆっくり立ち上がる。

「うん、わかった」

化野も続く。

「それじゃ、お大事にね。そうそう、明日の能力測定は大丈夫？」

そういえばそんなものもあつたな、と香取は思い出した。

「まあ、なんとかなるよ。いざとなったら保健室に逃げるし」

そう言うとき化野は安心したように頷く。互いに挨拶をして別れた。

「さて、と」

居間に戻り、香取はまず水を一杯飲む。

「ふう……」

何も考えたくない。いや、考えられない。

(……風呂入って寝よう)

寝ている間にすっかり冷めてしまった懲罰用のお湯もそのままに、彼は風呂に入ってすぐに眠ってしまった。

9th 疑惑のクラスメイト（前書き）

まずはこの震災に巻き込まれた方々のご冥福と、無事をお祈りいたします。

幸い作者の近くでは海から遠いため被害に会った者はいませんが、停電はしました。このケータイも自家発電で動かしています。

被災地の皆さん、頑張ってください。一人でも多くの生存を願っています。

9th 疑惑のクラスメイト

次の日。イマイチ調子の悪い頭を振って彼は目覚めた。

(うつ……)

昨日のこともショックだったが、今日も今日とて面倒事は続いている。日常は相変わらずであり、時間は無情であった。着替えて準備を済ませ、階下に降りる。珍しく母が台所に立っていた。

「おはよう。珍しいね、いつ帰ったの？」

「夜中よ。で、お腹は空いてるの？ 適当に作ったけど、味はいはずよ」

話しながら手元で目玉焼きを放り投げ、こちらに振り返りつつ皿でキャッチ。そのままこちらに差し出してくる。

「はい、その場凌ぎ。トースト焼いてるからしばらく待つてなさい」

お手軽に器用なことをやっておきながら、香苗は涼しい顔である。そんな彼女の異伝子は『悪戯』。名前は『器用な奇術師』^{トリックスター}と呼ばれている。彼女にしてみれば、この程度朝飯前だろう。文字通り。

「いただきます」

正直あまり食欲は無いが、今日は一日もしかしたら運動したままになるかもしれないのだ。腹にはなにか入れたほうがいいだろうと香取は判断する。

「そういえば……毎回聞くけど、あの論文何に使ったのよ？」

「いつもの如く黙秘させていただきます」

「ふーん。ま、勉強はいいことだね」

投げやり感たっぷりに言われる。両親にも自分の罪は言っていないのだ。それでも協力してくれることは感謝している。

「そういえば今日は、なにかテストがあるんだっけ？」

話題を変えられた。都合がいいので乗る。

「うん。今回は休み明けだからちょっと大袈裟になるらしいけどね」

「まあ、ケガしない程度にしなさいね？ 今日も私は帰りが遅いし、あんまり化野さんのところをお願いするのも気が引けるし」

「そういえば、母さんって化野とそんなに親しかったっけ？」

ふと気になったことを聞いてみる。

「あー。それはね、海より深く山より高い理由が……」

ないよね、と香取が速攻で突っ込むと香苗は、可愛げのない子だねえ、とため息をついて、

「職場が同じなのよ。向こうがこっちのことを覚えてたみたいで、なにかあったら遠慮なく言ってくださいね、こちらにはご恩があり

ますから、なぐんて言われたら、家にあまり居られない我が身としては頼みたくなっちゃうでしょうが！」

なんかもいろいろなとだめな人がいる。目の前に。

「それはさすがにマズいんじゃない？　甘えすぎな気がする……」

「大丈夫よ。もう少しでお父さんも帰ってくるし、それまでよ」

そっついながら、焼いていたのであろう薄切りベーコンを山盛りに出す。ついでに焼けたトーストも。

「あ、父さんもそろそろ帰ってくるの？」

「ええ。年末らしいけどね。それも少しの間だけ」

父の顔を見るのは約一年ぶりになる。毎回妙なお土産を持って帰ってくるので若干楽しみだ。

「さ、早く食べて支度しなさい」

「はい」

学校に到着すると、校庭に見慣れない四角形が幾つかできていた。まるで舞台である。ざっと見ただけで20以上か。

（何だろ、これ）

酷く質素だ。ただ白い、石の台。上から見たらただの四角だろう。
フェンスも何もない。

（まさか、この上で大立ち回りやらかそうってわけじゃないよね？）

そんなことを思いながら、教室へ。登校時間には若干早かったが、
案外人はいた。大人しく席につき、正面の黒板を見ると。

（……物騒なっ！）

『夢見、死ね』と、白いチョークではみ出さんばかりに大きく書か
れていた。

思わず隣の席を見る。不在だった。

（どういうことだ……？）

死ね、という命を粗末にする文面が気になる。頭に一気に血が登り、
思わず冷静さの仮面が剥がれてしまいそうになる。が、それ以上に
なぜ彼女がそんなことを書かれなければならないのか、それが気に
なった。

近くを偶然通ったクラスメイトに聞いてみた。ショートカットでな
ぜか赤髪の男子は、あー、お前転校生だから知らないのか。あまり
言うなよ、と前置きしてから教えてくれた。

「夢見はな、人の命を奪って生きてるんだよ」

「……はい？」

最初から意味不明だ。

「いや、こいつは噂だけだな。あいつ、全滅した孤児院出身なんだよ。お前も昔ここに居たなら知ってるだろ、『聖十字救済院』っていう今はないデカイ建物さ」

「ああ」

言われて香取も思い出す。確か純力トリック系の修道院を兼ねた孤児院だったはずだ。香取も一度行ったことがある。

「あそこな、焼けたんだわ」

「マジか!？」

「大マジ。出火原因は未だに不明、ただ、冬で空気が乾燥、なおかつ風が強かったのもあって建物が全部燃えてな。修道士たちは出払ってたからよかったんだけど、孤児院側にいた大人五人と子供三人が巻き込まれたんだ」

そこまで聞いた辺りで、香取は話の先が読めた。

「で、夢見だけ生き残った、ってのか？ それだけで、これ？」

黒板を指差しながら香取は言う。それだけなら、ただ『運がいい』だけで済みそうなものだが……。

「ああ。こっからがこの話のキモさ。……実はな、他の人、つまり夢見以外の死体が全部ミイラ化してたんだと」

「み、ミイラ？」

「そう。カラツカラでしわくちゃの、ね。で、あいつの能力は『^{イン}精』。……後はわかるな？」

「ああ」

禁忌種の認定も拍車をかけているのだろう。つまり、夢見が死にた
くないと思い、他の人の生命力を奪って生き残ったという訳か。

「……悪趣味だな。広めた奴」

「いや、これ信じてる奴結構居ると思うぜ。だってあいつ、肯定し
ないけど否定もしないからさ」

このクラスにいる事情も、その辺りだろうか。

「ありがとう。教えてくれて」

「いやいや、どういたしまして。今日テストだろ？お前、気をつけ
るよ」

初めてだしな、といい残して、クラスメイトは教室を出て行った。

結局、板書は登校してきた夢見本人（今日も相変わらず長袖で手袋）
によって消され、クラスは何事もなかったように動き出す。

そして、その時間はやってきた。

「さて全員、体育館へ移動しろ。外は他学年だから間違えないよう
に。以上だ」

守屋の簡潔な号令に、クラス全員が動き出す。なぜか皆めいめいに物を持っていく。文房具から竹刀、挙げ句の果てには和人形まで。不思議に思っ、香取は隣の化野に聞いてみた。

「ねえ化野、みんな何持ってたの？」

ちなみに化野は何も持っていない。反対側の席の夢見もだ。

「あー。健はさ、自分の能力を使う時に何か使う？」

「うん」

黒いコートのことだろうか。

「そういうの。みんなそれぞれ、媒体だったり素材だったり、いろいろ必要な物を持っていくの」

媒体はまだわかるが、素材ってのはどういう意味だろうか。

「なるほど。じゃあ、化野はそういうのは要らないんだね？」

「うん。……そういえば健、体育館の場所、分かる？」

香取は数秒考えて。

「……できたら、案内してくれる？」

申し訳なさそうに言った。

10th 羞恥の体育館

校内探索の時、校舎内部は全て目を通していたのだが、体育館だけはどうやら別棟だったらしい。

渡り廊下を化野と歩きながら、香取はちょっと反省した。

「ところで昨日、帰る時に何かあったの？」

「え？」

ふと、化野に尋ねられた。

「うっん、別に他意がある訳じゃないの。ただ……」

「ただ？」

香取は先を促す。どうせ昨日のことだろう。きちんと説明すればなんとかなるだろうか。

「なんとなく、だけどね？ 健が教室に入った時に、何人かの態度が硬くなったの。だから、何かあったのかな、って」

やっぱり、昨日のことのようだ。

「それは……いろいろあったんだよ」

昨日の放課後のことを、かいつまんで説明する。もちろん、明かしているところまでだが。

すると、彼女はなぜか嬉しそうに笑った。

「なんか嬉しそうだね。こっちは守護役の職務に引っ掛からないか
ビクビクしてたんだけど」

香取が意外そうに言う。と化野は首を横に振った。

「能力を使った小競り合いなんてこの学園ではしょっちゅうだし、
そんなに目くじらは立てないよ。それより私は、健が昔のままだった
事が嬉しいの」

「……はい？」

昔のまま、とはどういうことなのか。香取は少しショックを受ける。
昔の自分が嫌で、わざわざ都市まで出て変わろうとしたのに。

「すぐに熱くなっちゃうところ、昔のままだね。誰にも言わないけど
絶対に譲れない一線があるのも、それを破られるまで必ず能力を
使おうとはしないのも」

「っ……！」

香取はほぞを噛む。どうしようもない無力感。この十年、結局無駄
だったのか。

「実は、最初は不安だったんだよ？　なんていうか、すごく希薄だ
ったもの……生気がないっていうか、どこか遠くを見てるみたい
な顔ばかりで……」

でも、その話を聞いて安心した」

先導してくれていた化野は振り向いて、笑顔を見せて。

「健は、変わってない。私を助けてくれた、あの時の健のままだつてわかったからね」

変わってない。その言葉が、彼女の笑顔と裏腹に香取の胸を痛める。

「ねえ」

だから、彼は尋ねた。

「化野は、どっちがいいの？」

変わらない、あの頃のままの自分と。
変わりたい、と足掻く、今の自分と。

化野の答えは、しかし彼の予想とは外れていた。

「え！？ わ、私は…… 変わっていく健のほうがいい、かな」

だって、と彼女は一息置いて。

「人間って、どんなに変わってもその『芯』は変わらないもん。健だったら、すぐに熱くなっちゃうところとか。だったら、私はもつというんな健を知りたいな。健の、違う一面を。だからもし健が変わりたいなら、私は応援するよ」

「……そっか」

化野の答えに対して、香取は何も答えられなかった。

そして、体育館に到着。これがまた広い。ものすごい数の生徒が居なければ、もっと広く見えるだろうか。

（テニスコート三つか四つは入るんじゃないのか、これ？）

しかもこの体育館、二階建て。香取たちのクラスは一階だが、間取り図を見るに二階も構造は同じだろう。

（どうやら一般開放もしてるみたいだな）

受付があったり間取り図が貼ってあったり、器具庫もかなりいろいろな道具がそろっているようである。

「健〜！ こっちこっち！」

ぼんやりしていたら化野に呼ばれた。行き着いた先は壁際。そして校庭で見たような白い四角形の舞台が。

周りを見れば、河合たちも居る。ちらりと目線が合ったが、すぐに逸らされた。怯えの色が見えなかったのは幸いと言っべきだろうか。

しばらくして、チャイムが鳴った。ざわついていた生徒がゆっくりと自分たちにあてがわれた舞台の周りに集まる。

すると、正面……横長で舞台袖まである演劇用舞台に教師が何人か出て来た。守屋の姿もある。マイク特有のハウリングノイズが数秒鳴った後、教頭らしき人物がマイクの前に立った。

「えー。では、これより能力階級測定及び認定試験を行います。まずは、規定の説明を、守屋先生から」

歳相応に減衰の目立つ頭髮をきっちり固めた教頭が、守屋と入れ替わる。

「では、今回の認定試験に関するルールを説明する。疑問点のある生徒は、各自の担任に聞いて欲しい。では……」

要約すれば、

- 一、試合は各自の舞台で二対一で行われる。
- 二、道具の使用は自由。
- 三、流血までいいが、それ以上は不可。試合後は怪我の程度によって保健室に行くこと。
- 四、勝てないと思えばギブアップは可能。但し不正を防ぐ為、最低五分はギブアップ禁止。
- と、こうらしい。対戦相手はくじ引き、もしくは希望で決定しているようだ。名簿番号で呼ばれるそう。

「……流血沙汰が有りって……」

「しょうがないよ。例えば、『自分の血液を操る』能力だったりしたら、何もできなくなっちゃうでしょ？」

「……」

納得はいかないが、規定は規定だ。どうにもならない。

「さて、ではまず一試合目の組み合わせを発表する」

そうこうしているうちに、守屋がやってきた。組み合わせ表らしき用紙を持っている。

「発表する。……七番と九番。舞台に上れ」

なぜか、全員から安堵のため息が漏れた。唯一、化野と夢見だけはそうではなかったのが気になる。

「おっしやあ！ かかって来いよ！」

そして実に楽しそうに関節を鳴らしながら舞台上上がったのは、手ぶらだが闘志が爛々と瞳に輝く、どこか粗野な印象のクラスメイトだった。

（ん……？）

その姿を見て、香取は思い出す。彼は『三人目』だ。

（……あら？）

だがしかし、その相手が出てこない。香取は河合の方を見る。確か彼が名簿番号九番のはずだ。

だが彼は、なぜかこちらを見ていた。首をかしげると、こう言われた。

「お前が転校してきたから、番号がズレてんの！ 九番、お前だよっ！」

笑いが起きた。若干の熱さを感じながら、香取は黒いコートを着て

舞台上上がる。

「では両者、開始位置に立て……始めっ！」

戦いの火蓋が、切って落とされた。

11th 逃避の戦い

「よし。先公は俺の希望をちゃんと聞いてくれたみたいだな」

開口一番、相手の手に光と共に剣が現れる。西洋剣の片刃剣によく似ていた。

「まずは自己紹介を。俺は王丈匠^{おうじやうたくみ}。『光輝の英雄^{アルトリウス}』なんて呼ばれてる」

香取はふと思い出した。確か、石川たちに頼まれた危険人物だったはず。

「火種でランクは忝だ。さて、テメエも構えな。とつととおっぱじめようぜ！」

こいつ、生粋の戦闘狂^{バトルマニア}か。そう香取は思う。だとすると、厄介である。加減を知らない可能性が高い。

（時間稼いでギブアップしよう。……疲れてるし）

ならば、と香取は口を開く。相手からペースを奪う事が肝要だ。

「指名だったのか。なら、僕も自己紹介を。香取健一。能力の名前は……まあ、見たらわかるし、言わなくていいよね。君と同じく火種で、ランクはまだ未定。今回で決まるのかな？ よろしく、つても変か」

そう言って、コートのポケットに手をつっ込んだ。

「……それにしても、『光輝の英雄』とは、また変わった名前だね？　しかもその剣、相当古い……」

「……あ？」

いきなりの語りに、ポケットから出てくる手を警戒していた王丈が軽く戸惑う。だが、香取は無視して続ける。

「古い剣、なおかつ光の属性、そして英雄。真っ先に浮かぶのは『アーサー王』だよ。名前の由来はその辺りかな？　じゃあ、その豆知識を披露してみせようか」

一つ息をついて、香取は更に続ける。

「知ってる？　アーサー王ってのは、虚構の創作物だって話」

「……何だと？」

乗った、と香取は内心で快哉を叫んだ。

「知らないのかい？　まあ、詳しい人のほうが珍しいと思うけどね。じゃあまず、アーサー王伝説の発祥の地は？」

「アイルランド及びブリテン発祥だろ。それくらいは誰でも知っているっの！」

澁みない王丈の解答に香取は頷き、更に続ける。

「そう。けど、史料を辿っても、その時代に『アーサー』なんて人

物は居ないんだよね。……もつとも当時、英国の侵攻を受けていた
せいか史料そのものかなり失われてるみたいだ。もしかすると、
記録に残ってないだけで『アーサー王』は実在したかもしれない」

でも、と香取は更に知識と時間とを引き替える。

「例え本当に居たとしても、本来とは全然違ってる。…… 実は、
『アーサー王物語』の成立した場所は英国なんだ。侵攻したイギリ
ス人たちは土着の物語の集合、マビノギオンを持ち帰り、当時流行
の『騎士道物語』に改竄していったのさ。
その証拠は、今君の手の中にある」

王丈が思わず自分の剣を見た。

「その剣の様式は中世のヨーロッパのものだ。製鉄の仕方、鉄の純
度、刃紋…… スクラマサクス、それもかなりの名剣だ。或いはその
系統だね」

「…… そうなのか」

「他に創作の証明としては、ランスロット卿なんかだね。彼も創作
で付け足された人物だ。仕えるべき主の妻、グイネヴィアと不倫を
してしまう…… いかにも、その頃の吟遊詩人が好みそうじゃない？
他の円卓の騎士、例えばガウェイン卿なんかは、きちんと元になる
『ガーフエイ』みたいな神格が居ただけど、彼だけは見当たらな
いしね…… と、こんなところかな」

香取は言葉を切った。打ち止めという訳ではない（むしろ本番のネ
タ、彼の剣についてはここからだ）が、時間はもう充分だろう。

皆が唐突に始まったアーサー王談義に目を白黒させる中、唯一スト
ップウォッチで時間を測っていた守屋に香取は尋ねた。

「ところで先生。今始まってから何分経ちましたか？」

「五分と十七秒だな。聞いてどうする？」

あ、と誰かが気付いて声を上げた。

「ギブアップする気かー！」

皆がどよめく。

「よくわかったね。というわけで先生、俺はリタイアを宣言します。
壹位に勝てる訳ありませんって」

そう言って、香取は舞台から降りようとする。だが舞台の外に足を
踏み出そうとした瞬間。

「あいたっ！」

香取は見えない壁に正面衝突した。

「これは……守屋先生の『壁』？」

それはまるで鱗鎧のように密集した、小さな盾。それがいつの間に
か舞台を囲んで立ち上がっていた。

目の色が虹色に変化した谷原がそれを見て言う。あれが彼の能力発
動状態なのか。

（って、それよりも！）

「先生っ！　どういうことですか？！　五分経てばギブアップは認める規則でしょう！？」

だが、守屋の返答は真っ向からそれを否定した。

「いや。君に関してだけは認められない」

「どうしてですかっ！？」

「君は能力測定が初めてだろう。ある程度能力を見せてくれなければランク付けのしようがない。他の者なら、去年や春のデータを参考資料にできるのだがな」

そして、ふと視線を鋭くさせて、

「避ける、香取！」

叫んだ。瞬間、背後に感じる爆発的な殺気。

「……！」

振り返らずに香取は横に飛ぶ。それが功を奏した。

「っだらあ！」

衝撃。音の方に空中で首を捻った香取が見たのは、ミニサイズのクレーターとその原因になった片刃剣、それを振り下ろした姿勢のま

ま舌打ちをした王丈だった。

「っち。外したか」

「あ、危ないな君は！」

思わず言い返した香取の台詞を、王丈は無視した。

「やれやれ、焦ったぜ。まさか時間切れ狙いの狂言だったとはなあ
！」

マズい、と香取は直感した。間違いなくキレている。

「さあて、コケにしてくれた礼だ。本気を出してやるよ。……腕の
一本二本、覚悟しろやあ！」

再び、剣を構えて王丈が疾走する。だが香取は、動かなかった。

「打刀一本……」

呟く。同時に、彼の右手に空間から染み出すように現れたのは、彼の言葉通りの刃。彼はそれを、迫る王丈に向けて横なぎに一気に振り抜いた。

ギーン、と硬質な音をたてて弾かれたのは、王丈の剣だった。

「つく！」

摩擦で反動を殺しながら、王丈は踏みとどまる。

「はは、やるじゃあねえか。なら……」

言葉は、最後まで言えなかった。

「……！」

いつの間にか迫った香取が、袈裟に斬りつけてきたのだ。

「うおっ！」

思わず王丈は下がる。そこで香取がやつと口を開いた。

「……腕が無くなったら、人間はどうなると思う？」

「そりゃ……手術が必要だよな。下手したら失血死するかもしれないけど」

「死ぬ、ねえ……」

どこか虚ろな表情で、彼は王丈の言葉を反復する。

「田中、谷原、河合…… 不本意だけど、君達の願いを聞くことになりそうだ」

「……は？」

田中が意表をつかれて間抜けな声を出す。

「叩きのめして欲しいんだろ？ コイツを」

「お、おう……」

田中たちは思わず強張る。昨日の放課後と同じ声音に香取は変わっていた。

「ほお……俺を叩きのめす、ねえ……やってみろやあ！」

再び、王丈の剣が迫る。

だが、香取は表情を一切変えずに迎え撃つように構えて。

「剣食らい（ブリーズ・ド・フェール）」

金属の激突音と摩擦音が一瞬に連続し。

王丈の剣が、香取の刀に絡め取られて手から弾かれた。

「なっ！」

啞然として王丈の動きが止まる。武器を無くした相手に、香取は迷わず肉薄していった。

12th 異常者の戦い

「あれは…フェンシング…だな……」

守屋の『フアラックス重層歩兵軍』の外側で香取と王丈の戦いを観戦していた河合が、呟いた。

「な、なんだそれ？」

聞き付けた田中が尋ねる。応えたのは自身の能力『アクセスアカシック接続する世界史』を発動している谷原だった。

「河合の言うように、あれはフェンシングの技だな。しかも相当に難しい。普通相当な実力差が無ければ決まるはずのない、な」

しかも、と谷原は続ける。

「あれは本来、フェンシング専用のしなる細剣でなければできない技だ。それをただの刀であいつはやってのけた……異常と言っている」

ふう、と谷原がため息をつく。彼の能力は長く発動はできないのだと、そこに。

「谷原。君の目で見て、彼はとうだ？」

守屋がやってくる。

「……正直、分かりません。あいまい過ぎます」

「曖昧、だとは？」

「なんていうか…… イメージだけ見えるんです。いつもならもっと具体的なものが見えるはずなんですけど……」

「じゃあ谷原、何が見えるんだ？」

田中が尋ねる。

「『剣』。ただ、なんていうか…… 変なんだ。剣、なんだけど、形がわからない、みたいなの……」

「つまり……『剣』という……概念そのもの……ということか……？」

河合が呟く。

「ふむ。やはり実際に見なければわからないか」

守屋は自らの能力で作上げた籠の中に意識を向ける。壱位の全力には彼は対抗しきれないからだ。リアルタイムで壁を調整しなければ他の生徒にまで被害が及ぶかもしれない。

「さて、香取はどうなのか……」

守屋は、香取に期待している。既に壱位である化野とは良好な関係を保ち、なおかつ今、もう一人の壱位である王丈を圧倒して見せた。バランスー、あるいは抑止力にすらなる可能性があるのだ。

「さて……」

王丈は自分の剣を呼び戻した。香取も半身になって刀を構える。

第二ラウンドが始まった。

「なんだってんだテメエ、急にやる気になりやがって！」

香取は刀を鞘に納めながら、口を開いた。

「僕にはね、どうしても許せないものがあるんだ」

身体を螺旋に捻り込んでいく。

「それはね、人の命を脅かす事。他の何をしてもらっても、僕は能力を使わない。でも、それだけは許せないよ……」

そして、告げた。

「いまから四つ、技を見せよう。それだけで君を倒す」

更に捻じりあげ、それが頂点に達したその瞬間。

「一之剣『太刀風』！」

捻りを一気に解き放った。足首、膝、腰、肩、肘、手首、それらが全て連動する。しかもそれが、異伝子で強化されている体だったならば。

「おおおおおっつ！」

捻りが全て遠心力に変換される。その速度の最高点にさらに速度を叩き込むように鞘をレールに刀を振り抜いた。

その結果、剣先が音速を突破し衝撃波を飛ばす。

「う、おおおっ！」

距離を無視した攻撃に、王丈は果敢にも抵抗した。

「光よ！」

剣を掲げ、叫ぶ。すると、辺りが暗くなる。いや、違う。

（王丈の剣が、輝いて……！）

そして、その輝きがまるでブースターのように剣の背から噴き出した。

「せ、やああっ！」

そして、文字通り輝く剣が衝撃波を叩き割った。無形の空気の斬撃を。

おおお！ と外部から驚きの声上がる。香取と王丈、両方にだ。

「ヘッ！ どうだ？！」

王丈が挑発の言葉を投げる。だが、香取は全く聞いていなかった。

振り抜いた姿勢のまま全身を脱力させ、まるで倒れ込むように体を低くする。そして、

「二之剣、『残月』！」

脱力から一転、そのまま地面を這うかのように疾駆する。

「やらせるかよっ！」

王丈はさらに剣を輝かせる。蛍光灯程度だった輝きが、さらに増す。もはや、眩しさに直視できないほどだ。

「食らえっ！」

そのまま迎え撃つように振り下ろす。

「……甘い」

だが、香取はそれを読んでいた。鞘をつつかえ棒のように横に突き、スピードを落とさないまま僅かに右側にそれる。

そのまま、伸び上がるように下から斬撃を放った。横から見れば三日月のような弧を描き、王丈の腕を切断しかねない勢いで迫る。

「あああっ！」

だが王丈もまけじと剣から光を噴き出して右腕の向きを強引に左に変更した。両腕が左に流れる。

「困め、短剣を十三」

そのガラ空きになった胴を、香取の呼び出した短剣が囲んだ。

「しまっ！」

王丈は慌てて剣を一度手放し、今度は左手に再度呼び戻した。そのまま光を吐き出させ、その威力だけで短剣の幾つかをはたき落とすのける。

だが、そこに香取は告げた。

「三之剣『狂咲』……突き立てろ！」

残存する短剣が全て、突撃した後反り返るように斬り上る。

「痛っ！」

胴を斬りつけて血飛沫を飛ばす姿は、季節外れの彼岸花。

「クソがつ！」

王丈は叫ぶ。輝きがはぜて、短剣が四方に吹っ飛んだ。

「はぁ、はぁ……」

だが、それは相当な負担だった。王丈の息が荒くなる。

「ギブアップするか？　まだ最後の技が残ってるが」

そう言う香取も、大分疲労が見えている。剣先はもう、下がりがちになっていた。

「ハッ！ 冗談だろ。それより、やっとテメエの能力がわかったぜ！」

「ほう……？」

守屋が呟く。外からでは、『剣を呼び出す』までしか分からなかったのだ。

「テメエの能力、それは『剣』の名前を『言う』ことで『顕現』させる能力だ！ そうだろ！」

王丈の推測を香取は頷いて肯定する。

「表面上だけならそれで正解だ。ただ、本質は全く違うけどね。……表面上とはいえ、当てて見せたことを称賛するよ。ご褒美って訳じゃないけど、一回だけ本気を見せてあげる」

そう言った。

「今までが全力じゃねえってか？！ いいねいいね、じゃあこっちも全力出してやろうじゃねえの！」

王丈の剣が、持ち主の意志に応えるように更に輝く。辺りから光を奪うように増していくそれは、間違いなく光輝の英雄の剣。

一方の香取は、右手を肩の高さまで持ち上げて、一言。

「刃よ、原初の我に従え……」

言うなり、先程と同じく十三の短剣が彼を守るように現れる。

「さあ、もつとだ！もつと、輝けえええっ！」

「はああああああああっ……………！」

王丈の輝きと香取の集中が臨界まで高まる。解放のきっかけは、『壁』の軋みだった。

ギシギシ、と壁が悲鳴をあげる。

「まずい……！ 全員、伏せろ！ 壁が保たん！」

「手伝おう……！」

「お、おい田中っ！」

田中が飛び出すと同時に、自分の能力を行使する。

「固まれ……！」

手を触れた部分から、薄いプラスチックのような物が壁を覆っている。それは瞬時に硬化し、壁を補強した。

それを時間稼ぎとして全員が伏せたその直後、二人がそれぞれ叫んだ。

「吹き荒れろ、『野分の調』！」

香取が、指を鳴らす。

「全てを砕け、『光子爆発』！」

王丈が、剣を振り下ろす。

全ての短剣が、まるで台風に吹かれたように無軌道に全てを斬りながら暴れ回る。

溜めに溜めた光が、物理的圧力に変わり剣から爆発する。

壁が悲鳴をあげて壊れ、圧倒的な輝きと刃が光を跳ね返す煌めきが薄れた後。

余りの威力に一フロア全てが絶句した。その後。

薄れた輝きの中に、人影が立ち上がった。

13th 劇闘の後始末

輝きが霧散し、短剣を暴れさせた風が止む。
中に立つ影は、二つだった。

「や、やるじゃねえの……」

「耐えたのか、アレを……」

二人とも、満身創痍であった。香取は光爆を間近で受けたせいだ。服のあちこちが黒焦げで、王丈も無数の切り傷を負っている。

（もういい……かな？）

「さて、僕はギブアップさせて貰うよ」

「て、テメエまだそんなことをっ！」

激昂する王丈を、香取は押しとどめた。

「ちょ、ちょっと健！」

そのまま仰向けにぶっ倒れることによって。

「……は？」

呆気に取られた王丈の間抜けな声が、模擬戦の終了を告げた。

「王丈、大丈夫か？」

「当たり前だ！」

守屋の問い掛けに、王丈は荒々しく返す。

「ならいい。香取は保健室だな。保健委員は……夢見か。運んでくれ」

「わかったわ」

「わ、私も！」

倒れたままの香取を、夢見は持ち上げる。異伝子があるのだ。簡単である。化野も慌てて付いて行く。

三人が退出した後。遂に舞台に座り込んだ王丈が唐突に叫んだ。

「ふざけやがって！ あのクソ野郎があっ！」

「どうした。嫌いぞ」

見送っていた守屋が振り返って言う。

「どうしたもこうしたもねえ！ あの野郎、全然本気出してなかった！」

「……何だと？」

その発言に、一人を除いて場が凍結した。

「あいつ、結局教室で見せた予備動作無し、『無形の斬撃』を使わなかった！俺には使う価値すらないってのか！」

守屋は戦慄せざるを得なかった。一時期とはいえ王丈を圧倒してのけて、負けたとはいえ引き分け同然まで持ち込んでおいてまだそんな手を隠していたとは。

「底が見えないぞ……！」

もしかすると、彼はとんでもないことをクラスに起こすのかもしれない。

そんな予感が、次に場を支配した。

「重いわ……」

「手伝おうか？」

「不要よ」

こちらは、気絶した香取を運ぶ夢見と化野。彼女たちは今、保健室に向かっていた。

「さすがに男ね。けどまあ、これくらいなら大丈夫だわ」

「そっか。それなら、気になるのは健ね……」

「大方、力の使い過ぎでしょう。最後のあれで、残った体力まで使い切ったのね。手袋があるから、私の能力も働かないわよ？」

「継心ちゃんけいこの能力なら、心配してないよ。そういうのじゃあなくて、傷のほう」

そっちね、と夢見は相槌を打ちながら、香取をちらりと見る。

「目立った外傷はないわ。大体同じエネルギー量だったから、上手く相殺したのね。もしかしたら、刃の反射で『光』を防いでいたかも」

はー、と感心した声を化野が上げる。

「そんなのまで分かるんだ？」

「見ればだいたいはね。それが私の能力の一部でもあるわけだし」

と、化野の携帯が鳴った。しばらく通話した後、化野はごめん、任せると言った。

「どうかしたの？」

「なんか、王丈が暴れだしたみたい」

夢見は思わずため息をついた。

「……あれだけ暴れてまだ足りないのかしら……？」

あはは、と化野は苦笑いして走って行った。

「さて……」

それを見送ってから、夢見は唐突に言った。

「起きてるでしょう。悪趣味よ」

ピクリ、と香取が反応した。

「気絶してる人はね、体に力が入ってないから軽くなるの。で、あくまで無視するつもり？ ……落とすわよ」

「わ、わかったわかった！ もうやってる意味もないし、起きるよ！」

干された洗濯物のような体勢から、まるで前宙するようにして立ち上がった。

「あら……？」

が、そのままバランスを崩して尻餅をつく。

「あいたた……」

ちょっと無理したな、と言って香取は立ち上がる。

「……今、どうやったの？ 蹴る足場もないのに」

「うん？ 下半身から引きつける力だけで跳ね上がったただけだよ？」

しれつと恐ろしいことを言っただけの香取。

「能力も一級品なのに、体術までそのレベルなの……？」

それに、あはは、と香取は返して。

「というか、模擬戦の技のうち『壹』と『貳』の技は純粹体術だよ。能力は全く関係ない」

そのまま、普通に歩き出す。

「……治療、要るの？ さっきの模擬戦、まだやれるみたいだったし」

慌てて夢見は追いかけて、その背中に尋ねる。

「……まあ、不意ながらね。多分アバラが幾つかイッてる。筋肉もかなり痛めたし、できたら治療が欲しいところかな」

「……超人ね。普通なら痛みで動けないと思うんだけど？」

「無視してるだけだよ。……こんなの、痛みに入らない」

「……？」

その口調の裏に、ふと夢見は触れてはいけない何かを感じた。

（私も同じかしら……）

誰しも、触れられたくない点があるものだ。

「けど、保健室までは連れてくわ。一応仕事だし。異伝子保有者なら一晩寝れば大体治るけど、治療をしない訳にはいかないし」

歩けるわよね？ と尋ねれば、大丈夫と返る。

よく見れば、香取の歩き方もどこかばうような歩き方だ。

「無理してるわね？」

「うん」

素直に返ってきた。

「肩くらい貸すわよ？」

「身長的に無理だと思うな」

「……っ！」

夢見の背丈は、香取の肩程までしかない。それを指摘されて無性に腹が立った夢見は、思わず香取の膝を思い切り蹴飛ばした。

「いった！」

見事に向こう脛を蹴られた香取は跳ね回る。

「次言ったら吸い尽くすから」

「は、はい……」

半ば脅迫に、無理矢理頷かされた香取だった。

「先生、急患……じゃないわね。治療して欲しい人が……」

「……居ないみたいだね？」

保健室に着いた二人は、先生を呼んでいた。

「どうする？」

「とりあえず寝なさい。寝れば治るわ」

「治療抜きかあ。ありがたいお言葉」

身体を気遣って、ゆっくりと備え付けのベッドに寝転がる。

「一応、先生が戻るまでは居てあげるわ」

「どうも。けど、試験はいいの？」

「禁忌種よ、私。別途に検査されるわ」

本音を言えば、来る気は無かったのだけど、とどこか物憂げな顔で夢見は呟いた。

「……禁忌種、ねえ」

「何よ。私が怖くなったの?」

香取はいや、と首を振って、

「使う人が自分の危険性を自覚しているなら、どんな能力でもそれはその人だけの才能だよ。それに、君はきちんと対策をしてる。なら、怖くはないかな」

手袋を指差す。

「……というか、私の能力は知ってるのね」

香取は首を縦に振る。夢見はそう、とだけ言った。

「気に障ったなら、謝るよ。ごめん」

「いいわ別に。……代わりにって訳じゃないけど、あなたの能力、教えてくれないかしら。見てる限りあなた、本気出してなかったでしょう?」

「別に香取でいいよ。確かに、その方がフェアだね。なら教えよう。僕の能力は『剣之言霊^{ソードワード}』。『言葉』で呼び出した『剣』を操る能力さ」

「なら私も夢見でいいわ。傍から聞くと微妙ね。剣だけなの?」

「うん。但し、どんな物でも剣なら呼び出せる。『参』なんかはこれをフル活用してるね」

「なるほど。念動力みたいに飛ばすこともできるのね?」

「あまり得意じゃないけどね」

香取はゆっくりと目を閉じる。

「寝るの？」

「昨日はほとんど寝てなくてね」

「睡眠不足であれ……？」

夢見の呟きを最後に、香取の意識は眠りに落ちた。

14th 興味の足音（前書き）

長く間を開けてしまい、もうしわけありませんでした。

ここ一か月で周囲の環境が激変し、パソコンにすら向かうことができませんでした。

現在、少しでも状況がおちついてきて、なんとか執筆ができるようになってきました。ペースは相変わらずゆるいですが、よろしくお願ひします。

14th 興味の足音

夢を見た。よく見る夢だ。目の前に剣が一本、まるで待っているかのように浮いている。

（掴め……！）

どこからか、声がする。重厚な声だ。思わずひれ伏したくなるような、絶対の命令権を持つ声。

香取は手を伸ばす。剣は不動で、まるで待っていてくれるかのように中空に浮いていた。

だが、届かない。後少しのところでは手は空を切り、いつものようにそこで目が覚めた。

「う……」

頭が痛い。吐き気がする。あの夢を見た後は必ずこうなるのだ。

「あら、起きたの？ 動かないで……」

こちらを覗き込んでいたらしい夢見が、こちらの目を塞ぐように手袋を外した手をかぶせる。

すると、頭痛と吐き気がずっと引いていく。

「これは……？」

夢見の手から、ゆっくりと熱いエネルギーのようなものが流れ込んできた。

「貴方の能力のことを聞いておいて、私だけきちんと教えないのは公正じゃないわ。だから、皆には秘密だけど貴方には教えてあげる」

夢見の手からの熱感が、全身に回りきる。ぬるま湯の風呂に漬かっているイメージ。

「私の能力は『^{サキュバス}夢魔』。他人から生命力を奪い、任意でまた別の人に与えられる能力……」

夢見が手を一旦放す。気付いてみれば、傷が全て塞がっていた。肋骨も完治している。確かに異伝子保有者の自己治癒力は凄まじいが、それにしても早すぎる。夢見はもう一度香取の顔に手をおいた。

「結果として、生命力を与えられた側の傷や不調が与えた力の量に比例して治療されるの。私自身の生命力を使うから、与え過ぎると私が死ぬけどね」

知ってる？ と夢見は前置きして、

「サキュバスとインキュバスは表裏一体だって話。二つは実は同じ『夢魔』で、サキュバスが男から生気を奪い、インキュバスがその生気を使って女を妊娠させるの。不義密通の言い訳にまでなった逸話まであるくらいなの」

香取は知らなかったので、へえ、と答えた。

「この『与える』能力を知ってるのは、貴方と守屋先生、それに化野さんだけよ」

だから、と息を継いで、

「他言無用よ。もし話したら……」

「話した、ら……？」

突然、腹部に重みが乗った。彼女が馬乗りになった、と理解すると同時に視界を塞ぐ手が離れ、それを上回る光景が目飛び込んだ。き

（かつ、顔が近いっ！）

真上に、夢見の顔があった。学校見学で遠目から見た時からまるで西洋人形のようなだと思っていた程の美人の顔が、独特の迫力で視界一杯に広がる。香取の白とは微妙に違う、極上の銀細工のようなブルンドがさらさらと流れ落ちてくる。耳にかかったその髪を手でかき上げながら、香取の目を真っ正面から見つめて言った。

「吸い尽くしちゃうから……」

まさに淫魔と呼ぶにふさわしい蕩けそうな声で囁いた。心拍数が跳ね上がり、目線を逸らしたくなるが、魔法にかけられたように逸らすことができない。というか、まずい。外の廊下を何人かが歩いていくような足音と声がする。

時間が止まったような沈黙。先に目線を外したのは夢見だった。

「さあ、驚かすのはここまでだね。もう一つ、香取君に用事があるの」

スルリと香取の上から猫のように逃れた夢見が制服のポケットから

ある物を取り出した。

「これ、あなたのでしょうか？ 返すわ」

「こ、これ……僕の携帯！？ どこにあったの！？」

彼女の手の中にあっただのは、前に落としたはずの香取の携帯だった。受け取って開いてみれば、きちんと起動する。携帯に財布の機能はついてないので、メモリーだけを確認した。

「大丈夫？ 一応、拾ってからはいんまり触ってないけど」

「あんまり？」

「電源を切ったわ」

「なるほど。ってそうじゃなくて！ どこで拾ったの！？」

「ああ、あなたを追いかけてたら道に落ちてたわ。あの時助けてくれたお礼は、さっきの治療でおあいこね」

助けてもらった、という言葉を引きかけに、記憶が蘇る。

「って、アレ君だったんだ！」

「ええ、そう。ちょっと情けないやり方だったけれど、感謝してるわ。噂のせいで無視されたりすることはあっても、命まで狙われるのは初めてだったわよ」

「な、情けないって……」

能力を使わない、と決め込んでいたから、あんなやり方になっていただけだ。（結局、使ってしまったが）

「じゃあ、前に学校に居たのは……」

身を守るためか。門に警備員が居る以上、不審者は入れないから街中より安全性は高い。普通なら家に籠ればいいのだが、彼女は孤児だ。

そこまで考えてから、彼はふと気付く。

「どうかした？」

夢見が怪訝そうな顔をしていた。

「……あなた、なんで私が学校に居たことを知ってるのよ。ストーリーカー？」

「偶然だよっ！」

誤解を解くために一通り香取は説明した。

「納得してくれた？」

「一応には。けどしばらくは身の回りを気をつけるわ」

「納得してない！」

と、ああだこうだしているうちに先生が戻ってきて、香取はきちんと治療された。

「……あいつ、悪い奴ではないようだな」

舞台での模擬戦を終えた田中は、呟いた。

「確かに……そうだ。だが……」

「うお、後ろに立つなよ！」

河合がいつの間にか背後に立っていた。

「む……すまん」

「いや、構わねえけど」

それで、と田中は尋ねた。

「なあ河合、お前は香取をどう思う？」

「どう……と言われて……も。結果だけ……見れば、彼は俺たち……との約束……を履行……してくれた」

そして、先程王丈が運ばれていった方向を見て、

「それに、『剣』の能力……ならば……あの時、俺たちを殺す……気はなかった……という……ことだ」

「だよなあ。けどあの顔、多分、殺すとなったら一切ためらわない

ぜ」

「だが、その代わり自制心は並々ならないようだな」

谷原が田中の右に立つ。

「あれだけの能力があるのに、自発的に振りがざす様子は昨日今日となかった。制御もきちんとしているように『見えた』。冗談抜きで『壺』も有り得るな」

ふう、と谷原はため息をつく。

「もし壺位になるとすれば、奴は選択を迫られるな」

ああ、と田中もため息をついた。

「『四王』にメンバーが増える可能性もあるのか……」

「逆も……有り得るかもな……」

と河合。

「俺らとしちゃあ、それを希望したいね！」

四肢を投げ出して、田中は天井を見上げた。

香取の選択次第では、学校のバランスは崩れるだろう。

「まあ、頭は相当切れるように見えた。化野とも親しいようだし、王丈には反感を買われている。大丈夫だろう」

谷原が断定する。彼の能力からしてみれば、未来の可能性を見る程度のことは容易いのだ。

「む……谷原、まさ……か……お前……」

「言ってくれるな、河合。俺でも未来を知ることが不可能、可能性がせいぜいだ。パーセンテージを増やすくらいしかできん」

「うむ……なら、俺も……聞かないでおく」

田中は、そんな会話を聞きつつ眠りに落ちた。

「おいおい王丈、楽しそうだな？」

体育館から少し離れた、器具庫の中。ほつり込まれた王丈は、呼び掛けに目を覚ました。

「その声は……」
『ワンマンフォートレス 一人要塞』か？」

「にしし、正解。ってか、アタシもいるよ」

さっきとはまた違う、今度は女の声が暗闇に響く。

「静かにしたまえ、デッドライン『死線』。一応彼は謹慎中だ。下手に騒いだら厄介だろう」

また別の声。最初とは違う男の声だ。

「いいじゃないの、『規定書^{ルブック}』。お前がすぐに済ませればいいだろ？」

その『規定書』と呼ばれた声は、軽く舌打ちをしてから王丈に尋ねた。

「暗くて見えん。守屋も考えたな。光源が無ければお前は意外に脆いということか。……自力で出られるだろう？ 光源は作っておいてやるから」

そう言ってから、声は一言告げた。

「宣言『螢火招来』」

言葉を表すように、頼りないが確かに光る球体が一つ生まれる。

「サンキユ。後は勝手にやるから、帰っていいぜ」

それを手に納めた王丈は、早速剣を呼び出した。

「つつれないの〜！ いいじゃんいいじゃん、もうちょっと親切にしてくれても！」

王丈の台詞に死線、と呼ばれた声が不満そうに騒ぐ。

「うるさいなまったく、だったらお前がやれよ！ 一発で戸くらいやれるだろ？」

最初の声が返す。

「いや。そんな事したら体育館が膽切りになるだろう。禁止だ禁止」

三番目の声が更に返し、更に続けた。

「帰るぞ。宣言『影渡り』解除」

「あ、ちよっ！」

その言葉をきっかけに、三人分の気配が消えた。

「……俺も連れてってくれればいいんじゃないかね？」

わずかな光源から光を剣に溜め込みながら、王丈はぼやいた。

15th 街のバランス

「では、ランクの認定を発表する」

試験から二日後。香取たちの教室では、新しいランク付が発表されていた。

「よし、俺四！」

「あー、やっぱり変わらないかあ……」

生徒が名簿番号順で呼ばれ、それぞれ様々な反応を返す。そして、香取の番が来た。

「香取。本日付で君を『壺』とする」

「……はい」

新しくなった赤い腕章を受け取る。クラスメイトからは、嘆息と驚きと称賛と、僅かな舌打ちが。

「王丈との模擬戦、見事だった。戦闘継続能力に多少の難が見られるが、『壺』には充分だと判定された。これに満足せず、更に上を目指してくれ。では次、木場！」

香取は席に戻る。結局目立ってしまったやるせなさに脱力しながら座ると、右隣りの化野が話し掛けてきた。

「やったね、健！ おめでとう！」

「ありがと、化野。けど、やっと化野と同じ位置に立てた、それだけだよ」

正直な話、やるせなさが先立つ。やはり悪目立ちはしたくない。だが、と香取は考え直す。せつかくの壱位、何とか上手く活用すべきだろう。

（例えば……守護役になってみる、とか？）

悪くないアイデアかもしれない。都市の治安を一手に引き受ける組織、さぞ対能力の研究が盛んだろう。もしかすると、彼の目的達成のヒントくらいはあるかもしれない。

「同じ位置……？」

何を想像したかは不明だが、化野が真っ赤になっていく。……あまり考えたくないが、化野はもしかしたら妄想癖でもあるのだろうか。十年間の内の変化をしみじみと香取は感じる。

だが次の瞬間、まるでスイッチを切り替えたかのように化野が真面目な顔になった。そしてその理由は、言われずとも香取は感覚で理解できた。

「人の背後に立つなら、一言断ってくれないかな、王丈」

王丈が、不機嫌さを隠そうともせず香取の背後に立っていた。そのまま、彼に似つかわしくない厳格な声で言った。

「先ずは称賛を。おめでとう。新しい壱位を私たちは歓迎する」

そして、と一拍おいて、王丈は言った。

「俺を含む『四王』は君を五人目の『王』として迎え入れる準備がある。これは俺たち『四王』の総意だと思って差し支えない。今日の五時、中央棟の屋上に来い。……伝えるべきことは伝えた。来いよ」

有無を言わずそれだけ述べて、彼は席に戻る。そのまま、つまらなさそうにうたた寝を始めた。ふと気付くと、夢見がこちらを見ている。

「どうかした？」

「別に。私には関係のないことだわ。……香取君、よく考えなさい。あなたの選択次第で、この学園の、いいえ、都市全体のバランスが崩れる可能性がある」

「……？」

そんなことを言われても、香取にはピンと来ない。

「ねえ健、昼は暇？」

首をひねっていると、化野にふと尋ねられる。

「ええと、うん。何か用？」

「うん。さっき継心ちゃんの言ってた『バランス』と王丈の言ってた『四王』について教えてあげるから」

「そーいうことなら、俺たちも行っているのか？」

「え？」

会話に割り込んできたのは、田中たちいつもの三人衆だった。

「『四王』なら、守護役の化野だけでなく一般人な俺らの意見も必要だろ？」

被害者は俺らメインだしな、と田中は付け足す。その顔は、いたずらに困る子供のような、しかし若干の悲壮が混じる、微妙な顔だった。

「だ……な……」

河合が口を挟む。この三人、意外にも未だに香取に絡んでくる。いつの間にか昼飯まで囲む仲だ。

「じゃ、昼は五人でかな。学食？」

「僕は弁当なんだが」

「学食で食えよ。席が取れるかどうかだな、問題は」

「俺が……やろう」

「よし決まり！　じゃ、昼飯は学食だ！」

こうして、昼の予定が一つ決まった。

「で、その『四王』って何なのさ。物騒っていうかいい加減言わせて貰えば年齢考えて名前つけようよ!」

昼休み、学食にて。河合がその巨体をいかに発揮して取った席で、香取たち五人は座っていた。で、香取の第一声がこれである。この街、全体でRPGやってないだろうか。

「ま、確かにネーミングセンスは無いな。元ネタは『四天王』だっけ?」

「確か、マスコミが使い始めたのが切っ掛けだったな。で、四人側が調子に乗って名乗りだしたはずだ」

「詳しいね、谷原君」

化野が谷原に突っ込んだ。谷原は不敵に笑う。

「これでも調べたのですね。守護役の下っ端程度の知識は持ち合わせているつもりだ」

俺らも一応知ってるぜ、と二人が手を上げる。

「それなら、こちらとしても説明しやすいけど……健はわかる? 今の説明で」

「ま、まあなんとなくは……けど、詳しく説明はして。よくわからないのはなんか嫌」

断言する。ハッキリしないのはあまり好きではないし、情報は多い

ほうがいい。

「そんなら、まずは基礎から。『四王』って名前からわかる通り、王丈含めてメンバーは四人。どいつもこいつも曲者揃いで、目下守護役の最大の敵対勢力ってどこか」

「たった四人で最大の敵対勢力？」

「というより、幾つかの勢力の纏め役ってとこかな……私たちが捕まえるのはいつも尻尾ばかり、証拠も全部消されてる。王丈以外は名前もわかんないし、わかってるのは二つ名だけ。それも本物じゃなくて、偽名みたいだし」

「聞いてもいいのか？」

「本当は秘密だけど、特別にね。『霸王』『法王』『冥王』『聖王』。王丈は『聖王』ね」

「また自己主張の強そうなメンバーだな。四人も『王』がいたら絶対ケンカ始まるだろうに」

一番厄介なのは、と化野は言う。

「全員、推定で壱位。もしくはそれ以上。学園の能力試験も万能じゃないから、もしかして手を抜いてランクを下げてるかもね。……では健、ここで問題です。この街に、壱位認定は何人居るでしょうか？」

言われて香取は思い出す。確か聞いたことがあった。

「ええと、十人？ …… あ？！」

わかった。その顔を見て、化野が笑顔になる。

「そう。もし、四人とも手を抜いてないとしたら？」

「四対一、ってことか」

夢見の言葉の意味をようやく理解できた。これはやはり、バランスの問題だ。

十人のうち五人は中立を決め込み、どちらにも手は出さない。つまり、圧倒的にバランスが取れていないのだ。この状態で香取が五人目の『王』になったら、街は更に混乱するだろう。なにせ、彼が学校に通い始めてからまだ一週間も経っていないのに化野の呼び出しは見ているだけで三回も来ている。

彼女がその有能さ故に引っぱりだこだったとしても、これが街全体となれば事件の発生頻度は多分、考えたくないほど多い。

「その顔、この街の危険性をきちんと理解できたみたいだな？」

知らず知らず怖い顔になっていた香取を、田中が笑う。

「ったく、なにが昼行灯だってーの。蓋を開ければランクは壹、王丈とはガチンコできて、化野とは幼馴染み。どんな導火線だよ」

確かに、と化野が同意する。まあ、元が元だから仕方ないのかな、と香取は一つ、苦笑いをした。

「健のこの後の身の振り方で、この街は変わるよ。もし『四王』が増えれば、街は更に緊張する。中立なら、大きくは変わらないよ」

これは私の希望だけど、と前置きして、

「もし、もしも健が守護役になってくれるなら、私としても嬉しいよ？」

香取以外の三人が、息を呑む。そう言う化野の顔は、間違いなく恋する乙女のそれ。場面と台詞さえ違えば、初めてデートに誘うような雰囲気だった。

三人はまるで示し合わせたように香取の顔を見る。厳格な性格と頑固なまでの身持ちの固さゆえにあまりそういう対象とは見られないが、男女ともに容姿、性格の両面で人気は充分なのだ。普通の男ならイチコロだろう。

だが、香取は全く反応しなかった。いや、全くではない。一瞬だけ、たじろいだ。

(……引い……た……？)

それに気付いたのは、河合だけだった。彼は口下手だからこそ、表情の機微を読むことには長けている。そんな彼ですら注視していなければ気づかないほどの、ささやかな違和感。

(い……や……？)

河合は内心で首をかしげる。引いた、ではない。理解した瞬間に、自分を律して拒否したのだ。

なぜ、と疑問が生まれる。帰ってきた幼馴染みとの再会、更に好意はあからさまだ。そのまま恋に落ちる、あるいはその芽が出ることはあっても、普通は拒まないだろう。

少なくとも、互いに互いを憎く思っていないはずだ。教室でのやり取りを見ていればよくわかる。

（何か……理由……でも……？）

そこまで思い至っても、それ以上はわからない。香取はもちろんだが、化野についてもパーソナルをほとんど知らないからだ。

（うっ……む）

興味、というには少々邪だろうか。犬も喰わない、馬に蹴られて死ぬ、など言われるジャンルだが、元より猫は殺されるものだ、調べてみよう、と思った。

「まあ、考えてみるよ」

あっさりと、香取はそう返した。河合以外の全員が同じ理由でため息をつく。

もとより『四王』に入る気はさらさらない。だから、問題なのは後二択。

一般人の平穩、当初の目的通り化野とはつかず離れずを保ち今まで通りに償う方法を捜す道。

守護役の立場、当初とは違ってしまいが化野の役に立ち守護役の権限を活用し普通の人では触れられない情報も用いて贖罪の手段を探す道。

どちらも魅力的だ。特に後者、一般人より強い権限が与えられるというのは大きい。

だが、別の疑問が生まれる。

果たして自分には、彼女の役に立つ資格があるのか、という問題だ。

頭の中で声がする。身を引け、今そんなことは許されない、と言う。だが別の声は言う、未来の為には、手段を得る為には後者が有利であると。

過去の贖罪と未来の希望。板挟みは現在。詩的に言い換えても、解決にはならない。

「……まあ、五時まで時間はある。ゆっくり悩めばいい。それより、急がなければ昼休みが終わるぞ?」

いつの間にか弁当を食べ終えていた谷原が手を合わせた。ほとんど喋ってなかったのはそういうことか! と田中がぼやく。壁の時計をみれば、昼休みの終わりまで後十分だった。皆慌てて昼飯を消費することになったのである。

16th 王の誘い

そして、午後五時。香取は一人屋上へ出向いた。

若干錆び付いた戸は、少し軋みを上げて開く。そして見えた屋上には……誰もいなかった。

「……あら？」

拍子抜けはしない。ただ、一瞬だけ気は緩んでしまった。見回してみても、人影はない。

「宣言『転移』」

いきなり背後から声がする。慌てて振り返ると、いつの間にか四人、奇妙な仮面を着けた人物がいた。

一人は背が高く、百科辞典のような厚みの本を抱えてこちらを見ている。いや、観察しているのか。

次はなんと子供。しかも服装からして女だ。なぜかポケットというポケットにマッキーペンが入っている。色も様々だ。そんな彼女もこちらを見ている。これは、興味の気配。

三人目。これはわかる。体格からして王丈だ。

一番異質なのが、四人目。電動車椅子に乗り、小柄でしかも入院衣だがその視線に籠る力は凄まじい。気配は、読めない。

「さて、よく来てくれたとまずは言おう。……唐突ですまないが、君を拘束する。『冥王』、困んでくれ」

「りょうかい！」

「……は？」

意味不明。彼が困惑している間に、『冥王』と呼ばれたマッキーペンの少女が赤ペンの蓋を開けて投げる。

「動かないでね？」

思わず下げようとした香取の足を、忠告が縫い止める。赤いペンは香取を囲む四角を自動で描き、また少女の手に戻った。

「つく！」

香取は本能的に剣を呼び出す。それが、香取の命を救った。

じゅう、と焦げる音がして、剣先が焼き切れた。

「！」

少女の引いた赤い線。その線で壁が出来たかのように、そこに触れた部分が溶けたのだ。

「動くなよ香取。その線がこいつの能力だ」

王丈が、仮面を外す。表情は、笑顔でもなんでもない、無表情。

「まあ、君も忝位だ。警戒と思って欲しい」

厚い本を小脇に挟んだ男が、車椅子に手を乗せながら言う。車椅子

の男は無言だった。しかし、視線の強さは相変わらず感じる。

「っていうか。『法王』がやればいいじゃん！なんでアタシがこんな地味仕事しなきゃならないの?!」

「煩い。私の能力は連続では使えんのだ」

目の前の会話から、香取はひたすら脱出のヒントを探る。どうやらここに出て来たのは『法王』の能力のようだ。しかし、連続では使えないらしい。

（斬れる……か？）

さり気なく剣を少し動かす。相変わらず鉄をも溶かす高温の壁は、切れ目が見当たらない。

「無駄だったの。奴以外は許可されなきゃ線は越えられない。まあ座れ、俺たちはただ話をするだけだ」

その音を聞き付けた王丈が釘を刺す。香取は諦めて剣を床に刺し、抵抗の意志がない事をアピールした。

「よろしい。では、私たちからの問いは一つだけだ」

それを見て、辞書を抱えた男が言う。よく見れば、表紙には何も書いていない。中身は白紙のようだ。

「君は『四王』に入る気はあるのか。さあ、答えてくれ」

「待った。何の解説も無しにそれは酷だ。せめて、その申し出を受

ける事によるメリットとデメリットを教えて欲しい」

すかさず香取は解説を求める。入る気は無いが、それを明かせば何をされるかわかったものではない。せめて考えた上で断ったというポーズを見せる必要がある。

「うむ、それも道理。わかった、ならば語ろう」

辞書の男は大分話の分かる人物のようだ。油断はならないが。

彼はそこはかとなく楽しそうに話を始めた。

「まずは、私たちの目的を伝えよう。私たちの目的は、『ありとあらゆるものを利用し尽くし、各々の目的を達成する事』だ」

「……」

香取は絶句した。意味が、わからない。協力関係ですら無いのだから。見た印象、確かにあまり仲が良いとは言えない。もしかすると、繋がりそのものが緩いただの集合なのかもしれない。

「だから、基本は自由。特に会合等はなく、他の『王』と組むのも自由だ。利害さえ一致するならば、我々は最善のパートナーになる。但し、潰し合いだけは禁止だ。……このくらいか？」

法王が、他の王に尋ねる。冥王はないよ、とムスツとした顔で言い、王丈も同じくと言う。車椅子の男も、首を横に振る。

「良し。ならば香取、もう一度問う。君は『四王』に入る気はあるかね？」

尋ねる辞書の男。だが、香取は全く別のことを王丈に尋ねた。

「ええと、王丈」

「なんだよ？」

「この下って、何？」

「何って…… 教室だな。確か今は空き時間だった気がするぜ」

その答えに、香取はゆっくりと笑った。同時に、床に刺した剣に力を込める。

「……何がおかしい？」

辞書の男が、本を開いて構えた。彼なりの戦闘体勢なのだろうか。

「言っとくけどさ、アタシの引いた線は越えられないからね！ 諦めて仲間になろうよ！」

少女が無邪気にはしゃぐ。仮面の下はきつと、残虐な笑顔。

香取の笑顔が、変質した。同じ笑顔ながら、底知れぬ危険性を感じさせる笑顔に。それを見て、車椅子の男を除いた残り二人もそれぞれマッキーペンとスクラマサクスを構えた。

「コイツ…… やっぱり模擬戦じゃあマジになってなかったな！」

王丈の叫びにも、香取の笑顔は崩れない。

「……む？」

最初に気付いたのは辞書の男だった。足元が、揺れている。

「気付いたかな。けど、もう遅い！」

香取が叫んで、先端の欠けた剣を合図のように屋上から抜き放つ。直後、香取の足元の床が横一線に階下へ突き抜けた。

「ぬおっ！」

王丈が誘発されたひび割れに足を取られる。だが落ちる寸前に飛びのいて、無事な床へ逃げた。

「宣言『浮上』！」

法王が叫ぶ。四人の身体が空中にとどまる。つまり、線を床ごと壊して自由になった香取とは距離が生じることになる。

墜落しながら、香取は内心舌打ちをしたい気分だった。下に剣を呼び出し、階下から突き上げて床の線を破壊する。それだけの予定だったのだが、余りにも規模が大きすぎる。

……制御が、緩んできている。

それを悟られないように、してやったりといったげな顔で香取は上へ叫んだ。

「折角のお誘いだけど、辞退させてもらっよ！ 僕はただの昼行灯、

ちよつとパワフルなだけのただの一般人さ！ 分不相応つてね！」

戯言を吐き捨てる。こうすれば、彼らの興味は削がれるだろう。着地し、後はただただ一直線に帰路につく。念のため袖の中に剣を仕込んでいたが、結局取り出すことはなかった。

だがしかし、彼らの興味は削がれていなかった。仮面を外した各々の表情が物語るのだ。法王は興味を、冥王は悔しさを、聖王は対抗心を。

霸王、と呼ばれる車椅子の男だけは、読めない表情を。

それが香取にとっての障害になるのは、少し先のことである。

17th 情報の提供

そして、その夜。香取は自宅でヤカンを火にかけていた。

（しかし、どうしたものか）

湯気をたてるそれを見つめながら、香取は思索にふける。ちなみにヤカンの中味はお茶だ。懲罰用ではない。……今回は。

で、思案事項といえば、もちろん今後の身の振り方である。

（しばらくは、一般人として過ごすとして……）

『四王』に自分が昼行灯だと宣言した以上、すぐに守護役に志願すれば彼らを逆上させかねない。ならば、しばらくは中立を保つべきだろう。

「やっぱり、こんなところか……」

とりあえずの結論が出たところで、ヤカンを火から下ろす。ティーバックのお茶はまとめ買いが効くので香取家では常備品だ。高級品だろうがどうせ、味はわからない。

「こんにちはー！」

ピンポン、とインターホンが鳴ると同時に、化野の声がした。

「健ー！ 居るんでしょ！ 入るねー！」

「ええ！？」

ちよつと待った。鍵はかけていたはずだ。いやそれよりも、と体が玄関に向けて動き出すより先に、化野が玄関の戸を開けてしまった。

「うきやあつ！」

悲鳴と、鈍い激突音。

そう。香苗は玄関のトラップを外していなかったのだ。（便利なのよ新聞勧誘とかの撃退に、とは香苗）香取が急いで玄関に出ると、案の定跳ねるように開いた扉にぶつかっただけらしい化野が目回していた。

「だ、大丈夫か？」

香取が手を差し出すと、化野は若干ふらつきながらその手をとって立ち上がった。

「ごめん。玄関のトラップを外してないの言っておくべきだった」

「ううん。私が勝手に開けたのがマズかったの。大丈夫。もう平気！」

見て見れば、化野の額の赤みは既に引いていた。

……速すぎる。この再生能力、やはり十年前が影響してしまっているのか。

香取はそう思いながら、念のためタオルを冷やしたものを手渡す。

化野は気持ち良さそうに額に当てていた。

「それで、どうしたの？ うら若い乙女が出歩く時間じゃないでし

よう」

しばらくして、香取はそう切り出した。厳密には、八時台。あ、今九時になった。

「何って…… その、健は『四王』に入ったのかなって……」

心配そうな目で見つめられる。明日でもいい気もするが、彼女は特に心配だったのだろう。

「あの、健？　そこで固まられると心配になるんだけど？」

シンキングタイムを不審に思ったのか、化野の顔が心配から不安に変わる。香取はきちんと明言することにした。

「入ってません。前も言ったけど、僕は昼行灯だし、あんまりそんな意欲もないよ。何より、化野と敵対したくない」

そう断言すると、化野は嬉しそうに笑った。できるなら、彼女にはこうして人間らしく笑っていて欲しいものである。そこに自分も居られればいいな、と思うのはたぶん、いけないことなのだろう。

「…… ホントに良かったよ。…… うん。それじゃあ、ここからは私のお仕事の話」

化野が急に真面目な顔になる。反対に、香取は緩い笑顔に。何を尋ねられるかわかっていたからだ。

「どうぞ。いくらでも、洗いざらい、教えるよ」

「ありがとう。それじゃ、まずは『四王』たちの背格好から」

守護役にとって、目下最大の敵である『四王』との接触。更に四人全員とだ。こんなレアケース、滅多にないだろう。

香取は全てを話した。性別、仮面で隠れた顔以外の容姿、などなど。

一番化野が反応したのは、唯一の女性の能力についてだった。

「……つまり、その『冥王』のペンから発生したのは高熱で、見えない壁だったの？」

「うん。何か化野の知ってることと食い違ってる？」

「う、うん。私たちの側だと、彼女のペンから出たのは、冷氣だったの」

もちろん、健を疑うわけじゃないけど、と化野は付け足す。

「人は二つの能力は保てない。これは科学的にも証明されてるね」

数年前、異伝子発現タンパクの論文にあった。一種類の異伝子タンパクが起こせる効果は決まっており、二種類以上のタンパクは互いを殺しあうために二つの能力を得ることは不可能である。

「なら……別人、とか？」

「それは無いと思う。壹位クラスがそんなに多くはいないはずだよ」

香取の推論を化野は即座に否定する。なら、と香取はもう一つの思い付きを話した。

「『高温』と『冷氣』じゃなくて、『温度変化』の能力かな」

「あ、なるほど」

こう考えれば筋が通る。

「『ペンで描いた線上の温度を変化させる能力』」

「そういつことが」

互いに同意。それならあのカラフルなマッキーペンの量も納得がいく。

「さて、これで、全部かな」

その後しばらく、香取はひたすら話し続けた。どれもこれも守護役には貴重な情報である。化野は全てメモを取っていた。

「……うん！ これでよし。明日の定例会議の題材ができたっ！」

定例会議？ と香取が尋ねる。週頭にある守護役の集会だよ、と返事が。

「そうなのか」

いつの間にか、時刻は十を回っていた。

「そろそろ帰るね。夜も遅いし」

「送ろうか？」

半ば条件反射で香取が言うと、化野はなぜか微妙な顔をした。

「どうかしたの？」

「あ、うん。何気なく思ったけど」

そこで彼女は少し声をひそめて、

「まだ、変な畏があつたりする？」

香取は記憶を辿りながら首を横に振る。リビングにある他の畏は、確実に腹パンを狙うクローゼットのグローブと、ビリビリモコン、花火の仕込まれた炸裂ラジオ、明かりを調節する紐に偽装した金だらい落下装置くらいか。

「引つ掛かりそうなものは無いね。多分」

「き、気になるなあ……」

念のため香取が玄関まで先導して、化野は帰っていった。

「…さて…」

することが無くなった人間というのは、変な気を起こしやすい。これはどこの論文だったか。数年前に心理学系の雑誌で読んだ覚えがある。

で、それに彼は全力で抵抗した。

（よし。能力の訓練でもするか）

無理矢理やることをひねり出したのだ。

彼は庭に降りる。一本だけの木が夏の季節にふさわしく葉を繁らせ、時折風にそよいでいる。

それを見上げて、香取はいつもの黒いコートを着て手を構えた。まずは威力の把握からだ。右手指を鳴らす。パキン、と心地よい音と同時にヒュン、と何かが高速で飛ぶ音がする。直後、木の枝が一本落ちた。

『飛ぶ斬撃』

これが『簡単に制御できるように貶めた』能力の使い方だ。刃未満のただ『斬る』だけのものを指鳴らしに連動させて放出している。

というか、そうできるよう自己暗示をかけた。ほぼ六年丸ごとかけて。それでやっと、自分で自分に能力を使うことを許したのだ。

（うつむ…）

だが、今日に至ってはなぜか上手くいかない。狙いはもう一つ右の枝だった上に、落ちた枝の切断面が荒い。これでは集中ができていない。

（どうすべきか…）

右手を再度鳴らし、今度は葉だけを狙う。一枚だけのつもりが、数枚が斬れた。

（まずいな…）

目を閉じる。黒い穴をイメージする。そこに沈むように、落ちていく。深い集中。暗い視界。思考が研ぎ澄まされる。その先に染み出すのは、古い鉄剣。古代史の史料にあるような、鏑も何もない、純粹な切断道具。これが一番簡略化した概念とも呼べる彼の『剣』のイメージだ。なぜ和風かは知らない。日本人だからだろうか。

（どうにも…）

教室での一件以来、能力の制御が緩い。相手を傷付けてもいい模擬戦では問題にならなかったが、この先これではいつあの時のように暴発するかわかったものではない。

…それだけは許さない。

原因を考えてみようか、と思いながら香取は目を開ける。そして切断した枝を足で踏む快音に乗せて斬撃を放つ。重要なのは、自分の出した音、ということである。

「…よし」

今度は思い通り斬れた。刃未満の何かが小枝の先端だけを斬り落とす。

「今日はこちらまでにしよう」

一応満足して、香取は家に戻った。

18th 呼び出しと腕試し

事件：とも呼べる事態になったのは、次の日の下校の時だった。

「失礼します。ここに、香取健一さんはいますか？」

明らかに別学年の校章を着けた男子生徒たちがやってきたのが始まりだった。

「香取ね。ええと…」

偶然近くにいた赤毛（木場というらしい）が応対した。夢見のことを教えてくれた彼は、それ以来ちよくちよく香取と話す仲だ。

「お、いただいた。香取、お呼びだぜ」

「ありがとう、木場。で、誰？」

「体育会系っぽい男連中。むさくるしいぞ？ 多分ね」

我がクラスの順応性は伊達ではない。一瞬来客に目を向けたが香取がらみとわかるとすぐに自分のことに戻る。もはやいちいち驚くような奴はいなかった。

「心当たりはないなあ…」

「『腕試し』じゃないか？」

「…『腕試し』？」

不吉な単語に香取が妙な顔を見ると、木場の後ろに偶然いた谷原が口を挟んだ。

「転入早々耆位に認定されて、しかも四王にも守護役にも所属しない以上、名を上げたい輩には格好の標的だろう。しかも、その…なんだ。見た目、お前は弱そうだから」

思わず香取は自分の顔を触る。そんなに情けない顔だろうか。

「というか、はよ行け。見ず知らずとはいえあんまり待たせるのは失礼だろ」

木場の言葉でやっと香取は状況を思い出した。みれば、男子たちは騒がしくこちらを観察するように見ていた。

…少し、不快感を覚える視線だ。

「どうする？ 俺は待つべきか？」

向かう香取の背中に谷原が尋ねる。

「河合と田中に先に帰るって言うておいて。長く、なりそうだ」

嫌な予感がある。そしてこんな時、それは大抵当たるのだ。

「あなたが、香取健一さんですか？」

廊下に顔を出すと、間髪を入れずに本人確認。嘘をつく理由もないので香取が頷くと、ついてきてくださいとだけ言って歩き出す。

「ちょ、ちょっと待て！　せめて用件くらいは…」

「向こうで話します」

香取の疑問は切って捨てられる。しかしその程度で怒るような神経を香取はしていない。

「ま、いいか」

聞こえないように呟いて、香取はひっそりとポケットに手を入れる。中の携帯電話を操作し、録音モードに。いつも眺めている画面、どれがどの位置にあるか忘れるはずもない。決定キーを押すだけの状態にして、香取は男子連中を見る。

肩幅のがつしりとした男、歩幅の長い長身、見事にモデル体型の三人。全員、着用義務のあるはずの腕章をつけていない。

そしてこれが重要なのだが、彼らに香取は囲まれている。先導、左右の背後と三角形にだ。

（逃がさないつもりなのか…？）

腕試し目的なら、ここまで嚴重にする必要はないだろう。そうなると、何か別の目的があるのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、どうやら目的の場所に着いたらしい。包囲が解かれ、香取の前に三人が並ぶ。周囲を見回してみれば、そこは中庭だった。ただし、人目につきにくい体育館との間のほらだ。

「さてと。そろそろ聞かせて貰っていいよね？　何がしたい……！」

最後だけ少し威圧感を乗せて香取が尋ねる。だが、相手は全く意に介さずに喋りだした。

「私たちの相手をしてください」

「腕試し、と見ていいのかな？」

探りの意味で放った香取の言葉だが、それは裏切られた。

「いいえ。個人的な理由です。では……」

モデル体型の男が、仁王立ちになる。それと同時に空気に染み渡る、戦いの気配。香取が忌み嫌うものだ。

だが、相手はそれを許してはくれない。香取も仕方なく右手指を鳴らすために構える。

「礼儀として、名前くらいは教えて貰ってもいいよね？」

「ええ。私は藤堂。アイアンメイデン『鋼鉄処女』と呼ばれてます」

そして後の二人が左右に立つ。右にがっしりした男、左に歩幅の長い長身だ。

「右が桐島、左が里見です。それぞれ『バンディット盗賊』、『クルーエル狂劇』です」

桐島と呼ばれた男は軽く会釈をし、里見という男は腕を組んでみせる。

「この二人は気にしないでください。…では！」

とん、と軽いフットワークの音。来る、と思った香取の腹に、唐突に突き刺さるような衝撃が襲った。

「が、はあっ！」

踏ん張りきれず、香取は吹っ飛ぶ。背中に当然のようにぶつかった壁がひび割れて、外壁ごと香取を地面に叩き付けた。

「これが、私の能力です」

痛みに暴れる視界を必死に修正する香取が見たのは、鋼の如く変色した藤堂の右手だった。いや、腕までか。

（硬質化……っ！）

香取は即座に看破する。と同時に、体のダメージを感覚だけでチェックする。幸いにも重傷の部分はないようだ。模擬戦で折られた肋骨も問題ない。

「いきなり、だね……！」

体を折り曲げて痛みをどうにか逃がしながら、香取は言う。

「内臓破裂でも起こしたらどうするのさ。……ここまでされたら、さすがにタダじゃおかないよ」

彼が能力を使うのは、他人の命にとって悪影響があると判断したときだけ。ただ、償う命を失くすわけにはいかない。今回はまあ、特例としてギリギリセーフだ。といっても、黒いコートが無い以上本

気は出せない。せいぜい『飛ぶ斬撃』が限度だろう。

「小手調べ、躲しなよ！」

パチン！と景気よく鳴る指に誘われるように、弧の斬撃が飛ぶ。基本的に直線にしか飛ばないものだから、躲すのは簡単はず。

「甘い！」

だが藤堂は避けることすらしなかった。硬質化した腕で弾き、更に踏み込んでくる。

（おいおい……！）

こうなってくると、出力を上げざるを得ない。だが、抑制の要のコートを着ていないうえに、最近の能力の不安定さが気になる。

（さて、どうする……？）

いつもの彼なら、真っ先に磨いてきた体術に頼るだろう。しかし藤堂の硬質化した姿を見れば即座に通用しないと断言できる。

（逃げられそうには……ないね）

後二人いる。『盗賊』と『狂劇』がどんな能力かわからないのだ。少なくともこの『鋼鉄処女』くらいは詳細が欲しい。現状、硬質化程度しか不明だが、それでも硬度、継続性、時間制限とこれだけ対処するために必要な情報がある。

「来ないならば、こちらからっ！」

痺れを切らしたらしい藤堂が鈍色の腕を振りかざして襲いかかってくる。

そのストレートパンチを香取は横からはたくことで避ける。と同時に腕が流れて空いた脇に直蹴りをかます。肉の潰れる嫌な感触がした。なるほど、鉄なのは腕だけらしい。

「くっ！」

もちろん、異伝子で強化された体にはそんなにダメージではないだろう。現に藤堂も顔をしかめたただけだ。

しかし、全身が鋼でないならやりようはある。

「なら、遠慮なく！」

香取は素早く反転し、近くにある巨木を狙って両手の指をフル活用して連続で刃を飛ばす。幹を半分ほど斬られたミシミシと軋む木を、香取は藤堂のほうに倒れるように殴った。

「っち！」

先程の脇腹への蹴りで警戒心を煽られ、前のめって脇腹をガードしていた藤堂は思わず両腕を頭上で交差させて止める。その空いた両脇に、香取は両手でそれぞれ狙いをつけた。

「チェックメイト。潰れるか斬られるか、選んで貰おうか」

先程、蹴りが通った以上そこは生身だ。木も重さはそれなりのはず、いつまでも持ちこたえられないとは思えない。

だが、そんな中で藤堂はニヤリと笑った。

「やれ、『盗賊』！」

19th 虐殺の覚醒

しまった、と香取が思う前に、飛び込んできた桐島の肘鉄が腹に鈍い音とともにめり込んだ。

「ぐは！」

しまった。気にするな、とは言われたものの、彼らが参加しないとあってない！

「けけけ、引つ掛かってやんの〜！」

桐島が耳障りな声で笑う。その隙に藤堂も大木を払い除けてしまった。

「……フェアプレイ精神って無いのかなあ……っ！」

完全に予想外の攻撃に、香取の体かなりのダメージが残る。しかも、この展開は最悪だ。

「そーなると、俺も参加するっすかね〜」

最後の一人、里見までが並ぶ。

「言い訳というわけではないですが、あなたは復讐に手段を選びますか？」

藤堂はそう言っただけ、また最初のように仁王立ちになる。そして懐から、何やら白い錠剤を取り出した。

「おいおい、まさかそんなものまで？」

その錠剤に桐島が反応する。楽しんでる、という風情の口調だ。

「劇薬『託卵^{かつこう}』。私たち『アルファベット』に渡された、『増強剤』です」

ご丁寧に説明をしながら、藤堂は『C』の刻印のある錠剤を飲み込んだ。一般的な錠剤より、サイズは少し大きいというのに、水もなにもいらならしい。

「はああああっ！」

直後、爆発的に膨れ上がる殺意。頭どころか全身が危険だと悲鳴をあげる。傷の類まで治療されているようだ。つまり、振出しに戻る、あるいはそれよりひどい状態になったのだろう。

「んじゃ、俺も！」

桐島も同じ錠剤を飲み下す。二回目となると殺意というより、これはただの爆発的なエネルギーの放出だとわかった。どちらにしろヤバいのにかわりないが。

「俺は……遠慮するっす。副作用とかヤバそう……」

あんな嫌な相手を三人もしたくはない。香取が安堵したのも束の間、里見は香取をじっと見つめた。

「けど香取さん、アンタには全力出してもらっつす。俺の『狂劇』

は、他人の感覚を狂わす能力つすから……制御リミッター、狂わさせて貰うっす」

ビツ、と里見は香取を指差した。そして、自分の能力の発動を告げる。

「さあ、カテンツア狂宴を始めるっすよ！」

「はい……はい。すぐ向かいます」

同時刻、携帯を片手に化野は走っていた。守護役としての呼び出しがあったのだ。通話はマイクとイヤホンで行っている。

「どういうことなの……？」

最近、この手の通報が連続している。人が突然衰弱して意識を失い、搬送されるのだ。

「で、異常は無しなのよね……」

そして、しばらくすると急速に前より元気になってしまうのだ。しかしその状態、ちょっと危険だ。要するに『ウズウズしちゃう！』状態である。良い意味でそのやる気が発揮されるなら構わないが、悪い意味で発揮されるとそれは困った事態になる。幸いそんな事は今のところ起きていない様子ではあるが、油断はできない。

「そ、れっ！」

化野はいつものようにビル屋上を飛び移りながら現場に向かう。習い事で早めに家に帰ったのがあだになった。結果的に現場から遠ざかってしまうことになる。

「守護役です！ 通してください！」

現場へはすぐに到着した。近くのビル屋上から飛び下りたのでダイレクトに被害者の側に来られる。現場には既に坂崎がいた。

「坂崎さん、被害者の方は……！？」

到着と同時に尋ねた化野は、答えを聞く前に被害者に駆け寄った。なぜなら、そこに倒れていたのは夢見だったからだ。

「け、継心ちゃん！？」

すぐに手首に触れて脈を確認。きちんと脈はあった。しかし、他の被害者と同じようにかなり弱っている。

「その制服、やっぱり知り合いだったかい」

「坂崎さん、一番近い病院は？」

「すぐそこだよ。まったく、なんだってこんな近くでぶっ倒れてるのやら」

化野が呼吸の荒い夢見を横抱きに抱えると、その意図を察したのか坂崎が手帳を取り出しながら言う。

「あとはアタシが引き受けた。任せな」

「ありがとうございますっ！」

言い終わるか終わらないかで、化野は自分の能力を行使した。足全体がまるで短距離ランナーのような足に変化する。

「すぐ着くから、待っててよ！」

その状態から、更に異伝子保有者の身体能力を加えたらどうなるか。答えを示してくれたのは、取り巻きの群衆だった。

「うおっ！」

「わきゃあ！」

スカートを押さえる者、よろめく者、中には軽く浮き上がる者も。その現象は一直線に病院に向かう。

その間、彼女たちのハッキリとした姿を見た者はいなかった。

「……かかったのですか？」

藤堂は里見に尋ねた。先程里見が目の前の香取に『狂劇』を食らわせたはず、なのだが。

「おい、動かねえぞ？」

桐島の言う通り、香取は下を向いて全く動かなくなってしまった。

「うーん。かかった感触はあったんすけど……」

里見も首を捻る。確かに、香取の中の『制御』という概念を歪めたはずなのに。だが現状、棒立ちになってしまっているだけ。

「『託卵』にも時間制限があるんだろ？」

「ええ。『四王』から私たち『アルファベット』に頂いたものですから、数に限りもあります。無駄遣いはしたくはないですね」

「その、『アルファベット』ってなんなんすか？ 自分、強くなれるからって誘われてきたっすけどイマイチこの組織わかんねっす」

「あー、そうか。里見は『アルファベット』に入ってから日が浅いしな」

桐島が納得して頷く。そして大仰に腕を広げて気合いを入れかけて……藤堂にいらまれてテンションが下がったらしい。腕まで下ろして普通に話し出した。

「ま、俺らの最大の目的はこの街最大の権力の象徴『四王』に入ることだな」

「どうにも守護役では、法に縛られます。だから、私達はそれぞれに叶えたい願いのため、『四王』を目指すのですよ」

「はー。やっとわかったっす。この人、『四王』からのお誘いを蹴ったからこうなってるんすね！」

「今更気付いたんかい……」

ボン、と納得して手を打つ里見見ながらも、藤堂と桐島は香取から視線を逸らさない。

と、やっと香取が顔を上げた。

「お、やっと起きたか」

桐島が声を出した瞬間、それは起きた。

「がふっ……?!」

藤堂の腹に、剣が突き立った。

「んなっ！」

里見が慌てた。だが、桐島だけは反撃に出ていた。

殴りかかる。だが、余りにも異常な手段でそれは防がれた。

剣が、彼を守るように積み上がる。一瞬で、彼と桐島の間には文字通りの剣山が出来上がっていた。

さすがにためらいを見せた桐島の腹にも、何の脈絡もなく剣が突き立つ。

「が…っは…」

まるで虫か何かを踏みつぶすかのように、命を奪おうとする。桐島が自分が最悪のミスを犯したことに気付いた時には、もう全てが遅かった。

「……………」

圧倒的に感情を喪失した目。藤堂たちの存在なんて認識されていな

い。剣を突き立てたことも、『小石が邪魔だったから蹴った』くらいにしか思っていないであろう、そんな目。

だが、藤堂は動いた。『鋼鉄処女』が薬で増幅された結果、硬化がほぼ全身に及んだ為腹を貫く剣が重傷にならなかった。

動いて、しまった。

「.....」

ドン、と鈍い音をたてて、もう一本、剣が突き刺さった。すぐにドン、と更に一本。

「.....」

ドン。

ドン。

ドン。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンド。

刺す剣が、止まらなくなった。明らかに過剰殺害。オーバーキル香取を守る剣が全て弾丸のように飛ぶ。藤堂にその全部が刺さるのに、数分も要らなかった。

（む、無茶苦茶だ！）

多種多様の剣が突き立つ度に死にかけた魚のように痙攣する藤堂を横目に、桐島は自分の腹に刺さった剣を叩き折った。抜けば余計に出血してしまう。脂汗がたらたら垂れてきて、痛みで頭が焼け付きそうになる。

（だけど……！）

これで、彼有能力『盗賊』の発動条件は成立した。

「うおおおおおおおおおおっつつっ！」

力の限り吠える。豹変した香取も気付いたのか、初めて彼を認識した。

「く、ら、えええええっ！」

直後、香取の腹にも剣が突き立った。

20th 狂気の剣宴（前書き）

長らく間が開きましたが、書き溜め分一気にいきます！

20th 狂気の剣宴

桐島は、自分の中に転写された能力に悲鳴を上げた。

（な、なんだよこれっ！）

彼の『盗賊』^{バンディット}は、実際に見て受けた能力の一部分を奪い取る能力だ。奪われた側は少しの間だけ能力が使えなくなる作用もあるため、与えられた名前が『盗賊』。

だが、奪った能力の量がここまで『多い』のは初めてだ。（あくまで個人的な感覚として、だが）しかも、根こそぎにした感触はない。ただでさえ『託卵』で増幅されているのに、それで奪ってもなお底が見えない。

「ど、どうするよ？」

思わず独り言を漏らしてしまうほど、桐島は混乱していた。

その隙に冷静に狂った香取がまた動き出す。

今度は明確な敵意を向けて。そして、狂ってから初めて叫んだ。

「あああああああ！」

咆哮と共に剣がまた飛ぶ。一本や二本ではない、数十の剣の弾丸。

「くそっ！」

胴体を狙って飛来するそれを、桐島は必死に避ける。

だが、剣は追いかけてきた。器用に向きを変えてくる。

ちくしょう！と悪態をつきながら、桐島は奪った能力で自分の剣を召喚、迎え撃つ。

金属音が連続し、剣どつしが撃ち落とし合う。だが、香取の剣のほうが多かった。

「くそっ！」

足りないと見た桐島が腕を突き上げて更に剣を呼んで撃ち落とす、そのわずかな隙に香取は腹に突き立った剣を抜いて捨てた。穴から血があふれ出すが、まったく意にかけず桐島にその手を向ける。直後、先ほどの数十倍でもきかない数の剣がまるで滝のように召喚された。

「うおおおっ?!」

能力の大半を奪われてなおこの威力。一位とはここまで規格外なものなのか。

というか、香取の出血が明らかに多い。下手を打てば命に関わる量だ。だが、気にもかけていないらしい香取はさらに自らをまるで砲弾のように突撃してきた。

「がああああああああ！」

常軌を逸した、正気を遺棄した叫び。それはどちらかといえば、荒れ狂う力に振り回されているようで…

…それに変化が起きたのは、すぐあとだった。

「む………?」

香取の動きが、止まった。桐島は神経をさらにとがらせる。この戦い、気を抜くイコール死に直結だからだ。自分の中にある『剣』の力に意識を集中する。表面だけをみれば、ただ剣を呼び使役する能力。

しかし、手に取ればわかる。その本質はもつと異質なものであると。滅茶苦茶なまでに積もり積もった、『切断』。執念すら感じるほどに募った『歴史』。奪った分だけでも、これだけのことがわかる。

つまりこの能力は、その気になればありとあらゆる時代の名剣名刀魔剣聖剣、大雑把に括れば剣と名のつくすべてを呼び出せるもの、なのだ。……表面を奪ってこれだ。ならば、その根源はいつたいなんなのだろうか。

思考が一瞬飛びかけるが、桐島はすぐに引き戻した。どちらにしろ、暴走状態ではまともに能力は使えない。精神がおかしくなっているため、正常な発動が不可能になるのだ。

（つまり、条件の上では互角！）

桐島はそう判断する。里見は後ろで縮こまっていて頼りにならないし、藤堂は虫の息だ。あまり時間はかけていられない。ならばすることはひとつ。『盗賊』の効力が切れる前に香取を殺し、自分たちはアルファベットの内部での更なる地位を獲得する。それだけだ。

「今こそっ！」

千載一遇のチャンス。そう判断して桐島は一息に接近した。どれだけ規格外であろうとも結局は物理攻撃、接近して当てたほうがダメージは大きいはずだ。だが、今回はさらに一工夫。

「食らえっ！」

直接に殴る。香取は微動だにしないまま穴の開いた腹部に受けて、きれいに放物線を描いて飛ぶ。

その最中、香取がまるで袈裟斬りにされたかのような派手な傷を負った。

「いよしっ！」

成功の結果に桐島は思わず拳を握った。

打撃に斬撃を乗せ、当てた少し後に発動させる。こうすれば相手は一度に二回の攻撃を受けることになる。当てるまでが厄介だがそこは元々「盗賊」は一度その能力を受けなければならない条件がある。だから多少のダメージはこらえられるように鍛えてきた体が役に立った。

「ぐっっっ！」

香取が苦悶の声を上げながら起きあがった。

ふらついて焦点を結んでいるかも怪しいが、その目には、わずかに正気が垣間見える。だが、体の制御権はまだ狂気が握っているらしい。血を流しながらも腕を前へ突き出す。呼び出されたのは、創作のなかで斬艦刀と呼ばれるあまりにも巨大な剣。

「消、エロオッ！」

振り落す。とつさに避けようにも、巨大さ故に逃げ場がない。

「うおおああああああっ！」

桐島は、死を覚悟する。残念ながら走馬灯はないが、かわりに剣が

作った影が視界を黒く染めていき……
紙一枚の隙間を残して、止まった。

「…………へ?…………」

落下のかわりに始まったのは、香取の凄絶な自傷の光景だった。
ズム、周囲に腹に響く音が鳴る。

香取が自分の腕に、剣を突き立てていた。だが、それだけでは終わらない。

手に。指に。肩に。胸に。もちろん反対側にも同じように順番に。
足に。膝に。脛に。腿に。苦痛で意識を保とうとするかのように。
桐島は絶句して見ている他無かった。明らかに死のうとしているようにみえる。

その間にも、香取に刺さる剣は止まらず……

藤堂と同じ、いやそれよりひどい状態となっていた。そして、顔以外ほとんどがスタボロになったところ。

「が、くう…………」

まるで断末魔のような苦悶を残して、香取はその場に倒れた。地面を打った衝撃で刺さった剣が動いたのか、電気を流された死体のように痙攣する。

「…………え?」

死んだ。そう思った。だが、彼は立ち上がる。もはや死体同然だが、それでも。

「は、はは、か、感謝するよ。はあ、つく！ やっと、正気に戻れた…………」

さあ、と一声おいて、彼は両手指を揃えた。

「続けようか。言っておくけど、今までが本気と思わないでよ？」

「……上等……！」

剣を呼び出しその手に握り、桐島は駆ける。香取も剣を呼び、腰だめにしてなけなしの体力を振り絞って猛然と踏み込む。
最後はシンプルに。決着は一騎討ちとなった。

21th 幕引きの交叉

「はああああああっ！」

「せやああああああっ！」

決着は、一瞬だった。まるで劇画のように、一瞬のみの交叉。

互いに獲物は剣のみ。その一瞬にすべてを込めて、香取は居合を、桐島は上段からの逆袈裟を。

すべてがスローモーションにも思えるその瞬間。互いに振りぬいて、先に倒れたのは……香取、だった。

だがその直後、桐島が血しぶきをあげて倒れた。

「っハア、ハア……か、勝てた、か……」

香取の体には、傷は増えていなかった。相変わらず剣山が立ち上がった風情だが、痛みを頼りに意識を食い止める。先ほど倒れたのは、体の制止が効かなかったからである。

「さあ、次で最後だ……」

自分に言い聞かせ、意識を繋ぐ。そして、最後の一人に向き直った。

「里見君、だっけ。君はどうする？ 見逃すことも、できなくはないよ……？」

剣を引いて構える。無理に戦うつもりはない（というか無理）ので、一応尋ねる。

だが、里見は立ち上がった。

「無理無理、敵うわけねえっす。けど、仕事だけはしなくちゃなんないの……」

ポケットから、彼も錠剤を取り出した。ただし、その色は『托卵』と違い真っ黒である。

「『寄生木^{キヤクキ}』。こいつだけは使わなきゃなんねえっすよ。そうしたら、俺は逃げるっす」

言っなり、その錠剤を彼は飲んだ。

「……？」

だが、なにも変化が起こらない。すると里見は、負傷した二人を抱えあげた。

「この二人はこっちで預かるっす。どうせ下っ端、『A』と『B』っすから、替えなんていくらでも効くっすけど、こんなでも先輩っすからね。回収も仕事っすよ」

「……待て」

「なんっすか？」

思わず香取は里見を引き止めていた。

「香取さん、そんな様でなにができるっすか。今のあんたはぼろ雑巾っす、『四王』もそんなアンタには興味無くすっすよ？」

何か気になるセリフがあっただような気はするが、そんなのはどうだ

つていい。香取を突き動かすのは、ただひとつの言葉に込められた
意思だけだった。

「お前……そいつらが、『替えの効くやつら』だって……？」

そう。香取には一つだけ、なにをどうしても許せないものがあるの
だ。

「人の命を、物みたいに扱うんじゃないよっ！」

命を奪う、またはそれに準ずる行動だ。

「うおおおおおっ！！！」

走る。死にかけのまま、里見に向かって。一方、藤堂と桐島を掴ん
だ里見も器用にファイティングポーズをとる……ふりをして一目散
に逃げ出した。

「待てっ！」

「そのセリフで待つ奴はいないっすよっ！」

異伝子を持つ以上、身体能力は一般人と比較すれば大幅に向上して
いる。しかし、それを考慮してもこの差はなんだ。いや、香取が遅
いのだ。傷だらけでまともに走れるわけがない。畜生！ と叫んで
も、通じるはずもなく。保っていた意識も限界を迎え、膝をついた。
最後に聞こえたのは、里見の捨て台詞だった。

「『四王』王丈さんからの伝言っす。『俺の願いが叶うまで、あと
五人だ……命と引き換えに命を得られるとしたら、お前はとうする

？』。以上です。……生き残って、くださいっす」

血が流れる。体の芯から力が抜ける。

(……ああ)

そういえば、死って怖いものだったっけ……

そんなことに今更気づきながら、香取の意識は闇に落ちた。

「緊急放送です。外科、内科、呼吸器科の医師並びに治療能力者は緊急のカンファレンスを行います。至急第三会議室に集合してください。繰り返します……」

化野がその放送を聞いたのは、夕方のことだった。夢見を運んでから、意識の回復を待っていた間のことだ。

(急患……？ それにしては大事すぎる気が……)

この病院は、この辺りでは一番の設備と人員を持っている。治療系統の能力を持った医師も当然居れば、それぞれの分野のスペシャリストたちもいるはずだ。その人員にまで集合をかけるとは、いったいどんな急患なのだろうか。

(事件の匂いがする)

職業柄、怪我や能力による被害はよく目にする。その対処法も。だがしかし、いまだかつてこんな規模の招集が掛かっているのは聞いたこともない。もし、その怪我が人災だった場合……

（十中八九、『四王』が関わってる！）

耳を澄ませば、廊下を走る医師たちの声がする。そのどれもが、困惑を語っていた。

ベッドに横たわる夢見を振り返る。いつものパターンなら、しばらくすれば目を覚ますはずだ。

書置きを念のため残すことにした。もし彼女がいない間に目覚めても、自分がどんな状態にあったのかはわかるだろう。

（継心ちゃん、ごめんね？）

心の中で謝って、化野はかけだした。

……その少し後。眠る夢見の枕元に、人影が立つ。

「約束の履行に来ましたつすよ。夢見さん」

そしてゆっくりと、夢見の目が開いた。

廊下に飛び出した化野は一直線に緊急治療室に向かった。幼いころこの病院にはよく来ていたので、院内の地図は頭の中にある。エレベーターを待つ時間すら惜しい。そう判断した化野は、迷わず階段へ。中央部の地下まで続く吹き抜けに飛び込む。

急患の治療は、大抵一階で行われる。文字通り「一刻も惜しい」からだ。

それをよく知っている化野は、空中で強引に一階の手摺を掴んだ。

「っぐうー！」

腕の筋肉が悲鳴をあげる。いくら身体能力が強化されようと、五

階からのフリーフォールの勢いには耐えられない。だが化野は『千変万化』でそれを補ってみせた。痛みをこらえつつも勢いをつけ、踊り場に飛び乗る。傷はおなじように『千変万化』で体を組み替えて治療し、また走り出す。廊下の突き当たり、そこが集中治療室だ。扉の前にいた医師に身分証明書を見せる。医師はすぐに説明をしてくれた。

「……なるほど。生死に関わる重症、身元は？」

まだです、との返事を聞いて、化野は頷いた。

「容体は？」

ストップリミット

「私の『刻限』と応急処置で時間を稼いでいます。カンファレンスは第三会議場で行われています」

「被害者の顔は見られますか？」

「駄目です。全身に刺さった剣が元でショック症状を起こしていますので、今は……」

「ま、待ってください。剣、ですか？」

思わず化野は医師の言葉をさえぎっていた。身近に剣の能力者がいるのだ。最悪の可能性が頭をよぎる。

「は、はい。大小様々な剣が、まるで剣山のように……」

「よ、容姿は?! その患者、もしかして白髪ですか?!」

化野の恐ろしい剣幕にタジタジになりながらも、医師は化野にとつて最悪の答えを告げた。

「は、はい。ストレス性の脱色が。傷の様子からして、暴走した可能性が高いかと……」

ふっ、と化野の意識が遠のく。だが、使命感が最後の一线を踏みとどまらせた。頭を振って意識をクリアにし、告げる。

「面会をお願いします。……もしかすると、知り合いかもしれませんが」

震える声で、そういつてのけた。

22th 救命の手段

手術中。

そう書かれた光る板を横目に、化野は座っていた。

「……………ああ……………」

先ほど見た光景に、思わず化野はまた目を覆った。覚悟ができていなければ、失神していたかもしれない。

『刻限』の時間停止（ちなみに、学園の四季の庭園を維持しているのもこの系統の能力だ）で停止させているので、抜けない剣がいくつもあるのだろう。凹凸でいびつにふくらんだ全身は包帯でくるまれている。まるでミイラのような香取の姿がそこにはあった。唯一本人だとわかる顔には酸素マスクがかけられていて、心電図だけがまだ生きていることを示していた。この手術もいわば、どこまで重症なのか測るためのものである。

「あ、あつた！ 健一っ！」

突然声がして、かけよってきたのは健一の母、香苗だった。顔面は蒼白だが、かろうじて冷静さは保っているようである。彼女はこちらに気づいて目を丸くした。

「って、育美ちゃん？ どうしてここに……………」

責任感から、なんとか説明しようと化野は口を開く。だが、出てきたのは全く別の言葉だった。

「お、おばさん……………ど、どうしよう……………？ 健が、健があ……………」

「！」

冗談抜きで涙腺が壊れたかと思うほど、化野は一気に泣き出してしまった。泣いたらだめ、と思えば思うほど、涙は止まらない。それを見て逆に冷静さを取り戻したのか、香苗はポン、と化野の頭に手を乗せた。まるで子供をあやすように。

「うちのアホ息子が手間をかけたみたいだね。大丈夫、こういうことはあの子、向こうではよくやらかしてたのよ。ここまでひどいはまあ、初めてだけど……いっつも、何も言わないで、背負い込んで、拳句の果てにこうなつて、悲しませて……何がしたいのかしら」

反対の手が、きつく握り締められているのを化野は見た。無力感から来る、自分への怒り。そんな感情が見て取れた。

「よりもよつて、こんないい子まで泣かせて……今回はかりは、許してやれないね。」

とつとと帰つてきな、このドあほう……！」

台詞こそ怒っているようだが、顔は泣く寸前だった。そこに、カンファレンスを終えたのか医師が一人やつてくる。やはりと言つべきか、相当難しい顔をしていた。

「……それで、どうですか？」

恐る恐る、香苗が尋ねる。医師は絶望的な顔で答えた。

「……非常に言いにくいのですが……施術は相当難しいです。剣の数が多いため、摘出には時間がかかります。まず単純に患者の体力が保つかどうか。次に、出血量が多いということです。圧倒的に足

りません。輸血でもギリギリで……これをなんとかしないと、どうにもなりません」

「そんな……」

香苗が悲嘆のため息をつく。香苗と健一の血液型は一致しない。肉親ですらそうなのだから、化野が一致するはずもない。だが、化野は言った。

「……私の血を使ってください」

「無理よ！ 育美ちゃんの血液型じゃあ、健一とは……！」

すかさず香苗は押しとどめた。致死量の血液を補うとなれば、相当な量の輸血が必要になる。そんな量を、いくら昔とはいえ体の弱かった化野に提供させるのは危険だった。ましてや、血液型が違うのだ。輸血は不可能である。

だが、化野は笑顔で答えた。

「忘れてませんか、おばさん。私の能力を」

あ、と香苗が一瞬茫然となった。そしてすぐに理解する。彼女は自分の血を変化させ、健一に適合させようとしているのだ、と。

「変身能力……た、確かにそれなら可能性はあるけど……」

だがそれは、相当に難しいことだ。彼女の能力は、イメージに依存する変身。

つまり、イメージできないものには変身できない。

今回の血液型などという、目に見えないものは相当難易度が高い、

いや桁違いのはずだ。

「……現状、それ以外の手段は見つからないと思います。協力をお願いできますか？」

だが、化野はやる、といったのけた。医師も頷き、何事かを通りかかった看護師に伝える。

しかしまだ、問題が全て解決したわけではない。

血はいいとしても、彼の体力がもつかは依然として不明だった。

皆が頭を抱える。こればかりはどうしようもない。あきらめて運を天に任せようと誰かが言おうとしたその時、階段から思いもかけない人物が下りてきた。

「……え……？」

相変わらずの黒い服に、白い肌。

コントラストも鮮やかに、夢見がそこに降り立った。

「私の力が必要かしら、育美さん？」

状況説明もなにもないはずなのに発せられる、すべてを理解しているような言葉。だが、それを詮索している余裕すらなかったのも事実だった。

同時に、先ほどの看護師がいくつかの医学書を抱えて現れる。

「先生、血液に関する本ですけど、とりあえずこれだけ見つかりました」

「了解。少ししたら香取君の手術のカンファレンスを始めるから、

第三会議室の先生方にお伝えして」

「わかりました」

走っていく看護師を少しだけ見送って、医師は振り返る。

「……そちらの方は、治癒能力者、ということではよろしいのですね？」

医師の問いに、夢見はうつすらと笑って答えた。

「結果としてそうなるわね。もともと、私のストック量にも余裕はあまりないから、頼り切られると困ります」

臆することなく、言っただけ。

「禁忌種参号、『夢魔』の夢見です。香取君とはクラスメイトで、ある意味命の恩人になるわ。だから、今回は私が……！」

助けたい、という無言の、しかしはっきりとした意思をその場の全員が汲み取った。

「……では、ご協力をお願いします」

医師は夢見にそう告げると、看護師の持ってきた本を化野に渡す。

「資料です。一応手元にあるものを全て。うまく使ってください」

そう言って、彼も去っていく。おそらく彼自身も会議に出なければならぬのだろう。

そしてその場に残された三人のうち、化野がまず本を開いた。彼女が一番時間が必要なのである。それを理解したのか、香苗は何も言わなかった。そのかわり、もう一人に水を向ける。

「夢見ちゃん……で、よかったつけ。ちょっと聞いていい？」

「はい。それで、为什么呢？」

意外と素直に夢見は答えた。その姿に、少しだけ目線を本から上げていた化野は少しだけ笑う。もともと彼女はいい人だ、と常々化野は思っていた。能力と経歴故に孤立し、あまり人と関わらないから冷たいように思われるのかもしれない。

「うちの健一があなたを助けたって言ったけど、あの子はいつたい何をしたの？ ……あんまり自慢できることじゃないけど、あの子は自分の能力を使ったがらない。なら、いったい何であの子はあなたを助けたの？」

「それは……」

夢見は全て説明した。老人に襲われたこと、間一髪でそこに香取が乱入してきたこと。携帯電話で芝居を打って逃がしてくれたこと。最後まで聞いた香苗は、安堵のため息をついた。

「良かった……あの子、能力は使わなかったのね」

「使わなくて、良かった……？」

夢見が疑問を返した。

「ええ。あの子、禁忌種だもの」

「「は、はい?!」」

衝撃の事実にも、図らずにも、夢見と化野の声が被った。

「あら、あの子の能力、本人から聞いてないの？」

果てしなく意外そうに、香苗は彼の能力の本当の名前を言った。

「『ふつのみたま 払ノ御魂』っていつてね。有形無形、概念だろうが法則だろうが、威力も距離も関係なく斬ってのける、完全な剣。ただ、全くもって制御が効かないのが難点なのよ」

重い事実を事も無げに言っで、香苗はため息をついた。その顔には濃い疲労がみえる。

その様子を見て、かつてはこんな事がよく有ったのだと二人は察した。どうやらそれは正しかったらしく、

「自分まで斬るなんて日常茶飯事で、病院もしょっちゅうだった。けど、ねえ……」

ふと、香苗が顔を上げる。釣られて二人が目線を追うと、第三会議室の戸が開く所だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3442q/>

異伝子保有者の街

2012年1月5日20時53分発行